笠利町文化財報告第19号

用　安　湊　城

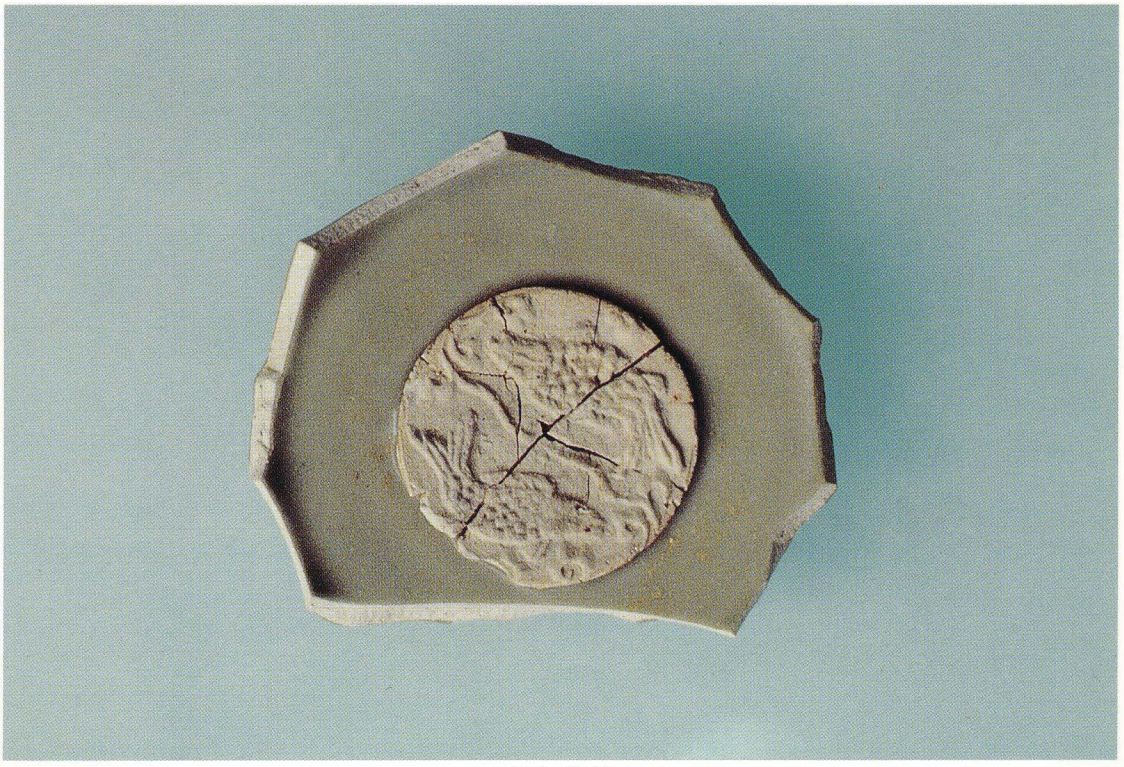
（ニヤトグスク）

― 主要地方道竜郷・奄美空港線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ―

笠利町教育委員会

インテルサット宇宙

遺　構



双魚藻紋

ミナトグスク上空より

ミナトグスク海上より

序　　文

この報告書は、主要地方道竜郷奄美空港線の道路工事が実施されるにあたり、与湾大親・湊城の文化財の確認と本調査をするために本町教育委員会が行った事業であります。

この調査は平成４年７月１日から平成４年10月３日にかけて実施し、13世紀のグスク跡が奄美で初めて発掘調査によって明らかにされました。

この調査が行われ、報告書が発刊されるまでに、大島支庁土木課・鹿児島県文化課・沖縄県立博物館・北谷町教育委員会・名瀬市役所・鹿児島県埋蔵文化財センターのご指導・ご援助により無事終了することが出来ました。

発刊にあたり、ご尽力下さった作業員、土地所有者、その他関係者の方々に深く感謝の意を表しますとともに、町民の皆様に埋蔵文化財を理解していただき、埋蔵文化財の保護と活用に一層のご協力をお願いする次第であります。尚この報告書が、南島のグスク時代解明の一助になれば幸いです。

平成５年３月

笠利町教育委員会

教育長　染　　光　義

報告書抄録

ふりがな	ヨウアンミナトグスク
書名	用安湊城　（ニヤトグスク）
副書名	－主要地方道竜郷・奄美空港線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－
巻次	
シリーズ名	笠利町文化財報告
シリーズ番号	第１９号
編著者名	中山清美
編集機関	笠利町教育委員会
所在地	鹿児島県大島郡笠利町中金久１４１　　TEL　0997－63－1218
発行年月日	西暦1993年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	北緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ヨウアンミナトグスク 用安湊城	大島郡笠利町 用安字車万川		－			1992. 7. 1 ～ 1992.10. 3	830	道路拡張工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
用安湊城	城	13･14世紀	四本柱 鍛冶跡 ピット 土塁	青磁 白磁 鉄器 銅銭 類須恵器 石器	台地状に立地するグスクでまだ後方（山手）部分の半分は残っている。

例　言

1．本書は、平成４年度に実施した主要地方道竜郷奄美空港線工事に伴う「与湾大親・湊城」の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は大島支庁土木課の委託を受け、笠利町教育委員会が実施した。
3．発掘調査の実測は中山清美と髙梨修がこれを行った。
4．発掘調査の現場写真は中山清美が撮影した。
5．本書に用いたレベル数値は、すべて海抜絶対高である。
6．遺物の水洗・注記・拓本などの整理作業は笠利町歴史民俗資料館で行った。
7．遺物の実測、トレース・写真撮影は中山・田畑・髙梨が行った。
8．本書に記載した遺物番号はすべて続き番号とし、本文及び挿図、図版の番号は一致する。
9．本書の編集・執筆は中山清美が行った。
10．出土遺物は笠利町歴史民俗資料館において管理・保管を行っている。

本　文　目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の概要
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 4
　第２節　遺跡の概要 ……16
　第３節　層序 ……24
第Ⅲ章　湊グスク（ニヤトグスク）の調査
　第１節　遺構 ……25
　　１．造成 ……25
　　２．四本柱（建物跡） ……27
　　３．棚列状柱穴群 ……32
　　４．鍛冶跡 ……32
　　５．ピット群 ……34
　　６．溝状遺構 ……34
　第２節　曲輪 ……36
　第３節　出土遺物 ……37

挿　図　目　次

第１図　島嶼 …… 3
第２図　黒潮海流図 …… 5
第３図　南島文化圏区分図 …… 5
第４図　海岸の名称 …… 8
第５図　用安集落グスク分布図 …… 9
第６図　笠利町の遺跡分布図 …… 11
第７図　バイパス路線計画図 …… 15
第８図　湊グスク周辺地形図 …… 15
第９図　発掘調査グリット設定図 …… 23
第10図　基本層序 …… 24
第11図　湊グスク断面図 …… 24
第12図　土留め石とサンゴ …… 25
第13図　遺構図 …… 26
第14図　１号建物跡 …… 29
第15図　２号建物跡 …… 30
第16図　３号建物跡 …… 31
第17図　湊グスク全測図（概念図） …… 35
第18図　白磁 …… 37
第19図　青磁 …… 38
第20図　双魚藻紋実測図 …… 39
第21図　類須恵器 …… 42
第22図　青白磁出土状況図 …… 42
第23図　褐釉陶器 …… 43
第24図　鉄・骨石・銅銭 …… 44

表　目　次

第１表　笠利町遺跡地名表(1) ……12
第２表　　〃　　(2) ……13
第３表　１号建物跡計測表 ……27
第４表　２号　　〃 ……27
第５表　３号　　〃 ……27
第６表　大島における鉄器出土遺物一覧表 ……33

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経緯

ここ数年奄美も多種多様の開発で埋蔵文化財の発掘調査が増えている。特に行政調査では新奄美空港に伴う砂丘遺跡、長浜金久遺跡、泉川遺跡、ケジ遺跡、和野トフル墓等が発掘調査されている。また奄美空港開港に伴い道路の整備も進められ、道路整備に伴った発掘調査も行われている。本遺跡も道路整備に伴う発掘調査である。

用安地区では与湾大親の墓地があると言われており、昭和45年頃に町文化財保護審議委員会で調査を行っている。しかし、その前にすでに何者かによって墓地の調査を行ったらしい。トフル墓跡からは与湾大親にまつわる遺物等が多数出土し、人骨も出土したという。その人骨の一部は後に墓碑を作ってその中に埋葬された。この人骨が与湾大親に関連があるかどうかは不明であるが、伝説のとおり、トフル墓があり、いくつかの副葬品も出土したということから何らかの関連はあったのかも知れない。町教育委員会では壊された墓地の跡から数点の遺物採集を行っている。後に与湾大親は笠利か、宇検村の与湾岳かという論争にも発展して行くが、考古学的な視点からは発掘調査で明らかにされておらず、全てシャーマンの世界であることからここでは言及をさけたい。出土地と出土状況の両方がわかっておらず、沖縄との関連が強いとするならばそれなりの学術的な調査を行う必要があろう。そのような基礎作業が行われていない限りにおいては与湾大親については推論にしかすぎないと、考えるからである。

湊城においては字名で湊城とあり、地元の方々は「ニヤトグスク」と呼んでいる。その山がグスクかも知れない。そうでないかも知れないということから遺跡の確認調査を行うとともに本調査を実施するに至った。ニヤトグスクについての伝説とかだれの居城であったかという言い伝え等はほとんどなく、記録もなにもない。

以上この発掘調査は道路拡張部分だけであり、西側山手に残る部分は調査対象外である発掘調査は大島支庁土木課と協議して記録保存を図ることになり、今回の調査が実施された。

第2節　調査の組織

発掘調査

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染　光義
調査責任者	〃	社会教育課長	南　隆光
	〃	課長補佐	別府良美
	〃	〃	勢　利久

調査担当者	笠利町歴史民俗資料館主査		中山清美
調査員	髙　梨　　修	調査補助員	田畑一哉

調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原和美
青山学院大学文学部教授	田村晃一
沖縄北谷町教育委員会	中村　愿
鹿児島県考古学会長	河口貞徳

報告書作成

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染　光義
調査責任者	〃	社会教育課長	南　隆光
	〃	課長補佐	別府良美
	〃	〃	勢　利久
調査担当者	笠利歴史民俗資料館	中山清美	
調査員	髙　梨　　修	調査補助員	田畑一哉（笠利町）、 田中聡一、市川浩久、蔵富士宏、 原田範昭（熊本大学） 森田忠治（法政大学）

調査指導助言者

琉球大学助教授	池田栄史
北谷町教育委員会	中村　愿
沖縄県立博物館	当真嗣一
鹿児島短期大学	三木　靖
熊本県文化課	島津義昭
青山学院大学	田村晃一

その他鹿児島県大島支庁土木課、名瀬市役所、笠利町役場、鹿児島県埋蔵文化財センター、鹿児島県文化課、熊本大学考古学研究室等の御協力を得た。

〈発掘作業員参加者〉

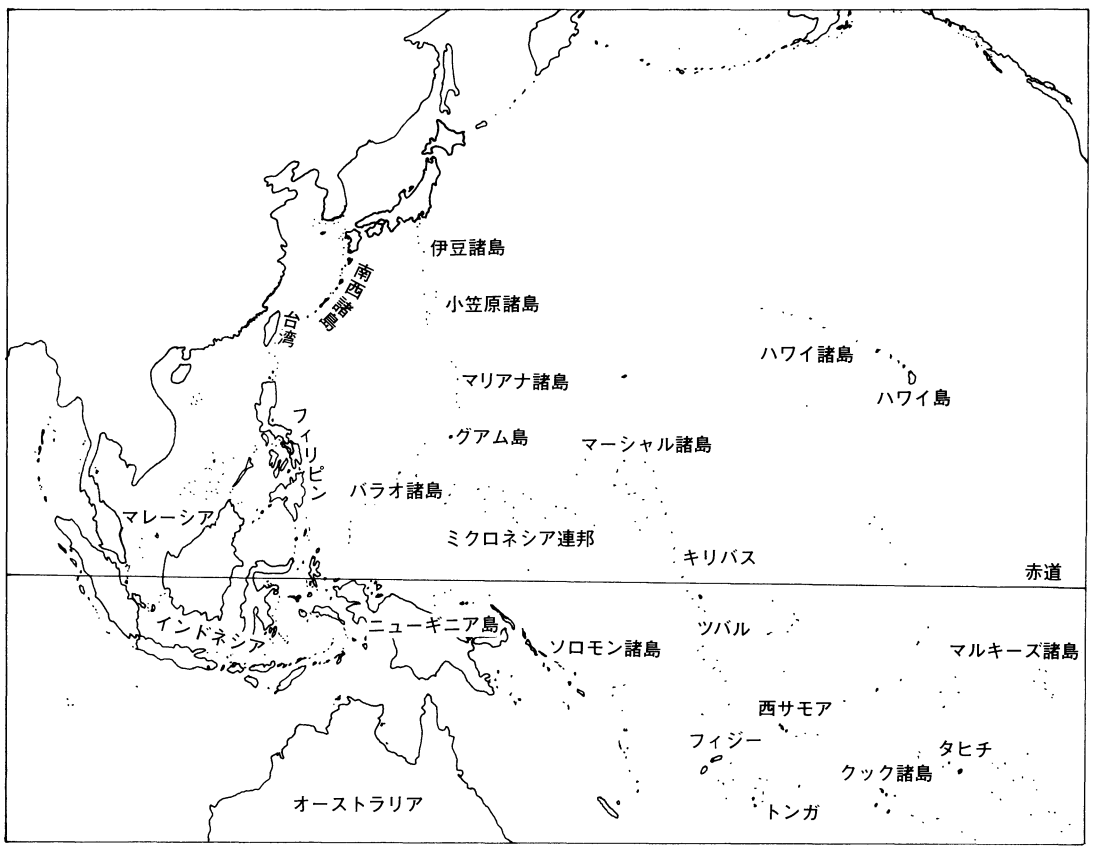
川畑テツ、坂下ヨチコ、竹　今恵、中村貴美代、竹田シズ、里倉和男、竹田稲博、山下長重、夜差丸男、竹田サキ子、前田ヒサ子、牧野哲郎、泉　扶代子、吉　誠一、城　弘樹、笑喜茂治、中野晴美、栄　香織、牧野瑞穂

〈整理作業員参加者〉

川畑テツ、坂下ヨチコ、竹　今恵、中村貴美代、前田ヒサ子

上記以外の多くの方々からも指導・御助言をいただいた。ここに感謝の意を表します。

発掘期間中、大笠利城前田文化財少年団、赤木名小学校、緑ヶ丘小学校をはじめ小・中学校の先生方が多数見学・実習に来られた。また学校が第2土曜日休校になったことで父兄で発掘作業に参加されるのも目立った。郷土教育に努力された先生方、父兄の方々の熱意と地元区長さん、ばしゃ山ダイビングスクールの指導の方々からは夏の熱い日々に氷・冷たい飲み物等の差し入れを頂いた。感謝！



第1図　島　嶼

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１章　遺跡の位置と環境

鹿児島から台湾にかけて弧状に連なる島々、有人・無人の島々はおそらく数百島になろう。これらの島々が黒潮海流のどまん中に見え隠れしている。台湾の南方に発流して北上する黒潮は地球の大道脈のごとく幅約200キロ、水深約1,000メートル、水温約15度以上、時速約８キロという大潮流が弧に連なる島々を抱き、日本列島まで暖かく包み込んでいる。この黒潮から昔から富をもたらし新しい文化を乗せて北上し、その流れの反流で北からの文物も乗せてくれた。我が南島はまさに北の文化、南の文化、大陸の文化をこの黒潮の影響で与えられた来た。まさに「黒潮文化」であろう（第２図）。

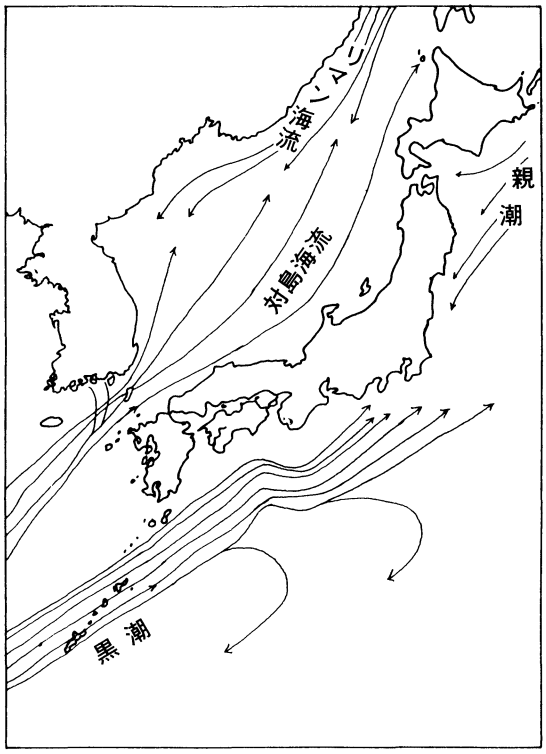
南島を国分直一は三つの文化圏に区分した。トカラ島以北を北部文化圏、奄美・沖縄を中部文化圏、宮古・八重山以南を南部文化圏として、その文化の相違によって区分している（第３図）。

中部文化圏にあたる奄美・沖縄は先史時代から類似する土器文化を持ちながらその共通性と相違点については未だ具体的に明らかになされてない部分が多い。近年になってようやく考古学的立場からの調査が行われ始めた奄美は、まさに九州本土と沖縄の谷間となっていた学問の一部を埋めようとする作業がようやく始まったと言えよう。

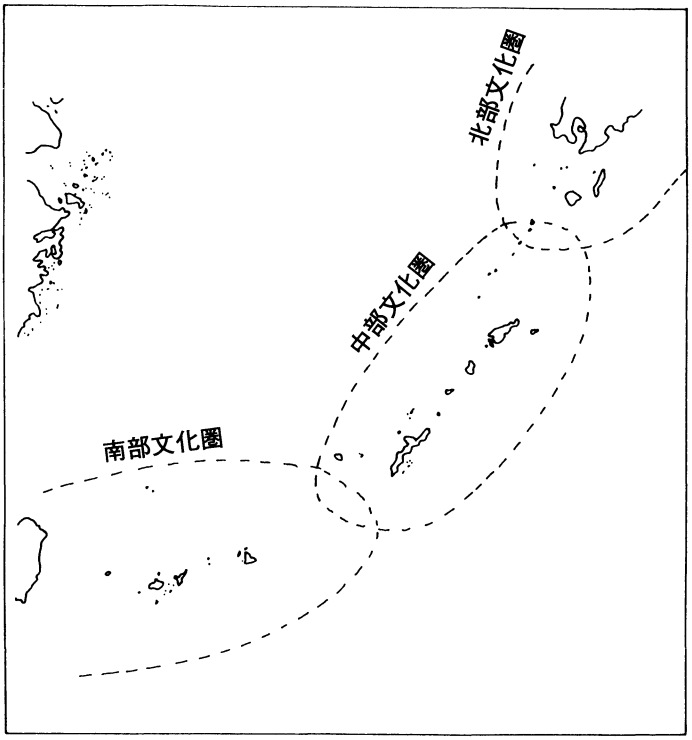
この奄美諸島は５つの主島から成り、喜界島・大島・徳之島・沖永良部島・与論島がそれにあたる。大島本島南部にも加計呂麻島・与路島・諸島があり、遺跡も確認されている。これらの島々を「奄美」とか「大島」とか呼んでいるが、国土地理院では「奄美諸島」として全体を呼んでいることから、ここでは「奄美」を全体的な呼び名にし、「大島」は大島本島を指す呼び名として記しておきたい。

奄美の中でも特に徳之島、大島、喜界に遺跡が集中しており、なかでも大島本島北部の東海岸は遺跡群を成している感さえある（第３図）。遺跡も旧石器時代の可能性の高い喜子川遺跡、国指定の宇宿貝塚、砂丘上に立地するマツノト遺跡、長浜金久遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ等々が発掘調査されている（第４図）。時代も旧石器時代から12～13世紀までのグスク時代までを含めると100をこす遺跡になる。ただし、グスクについてはまだ完全な分布調査が行われてないためその数は不明である。グスクは各集落地殻に１～３ヶ所は存在していることから、今後の調査が注目されるところである。

これらの遺跡が存在する笠利町は大島の中でも最北端に位置し、南北約15㎞、東西約４．５㎞の細長い半島をなしている。半島は南北にのびる高岳・大刈山・淀山等からなり、ほぼ中央を東西に分ける地形になっている。この最高峰の山でも183.6ｍ（高岳）であり、半島全体は大島本島の中でも比較的平地が多いのが特徴である。



第2図　黒潮海流図



第3図　南島文化圏区分図

〈地名表作成、奄美文献〉

1．三完宗悦「南島の先史時代」『人類学先史講座16』雄山閣　1941年

2．河口貞徳「南島の先史時代」『南方産業科学研究所報告』第1巻2号　1956年

3．国分直一、河口貞徳、曽野寿彦、野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」「奄美の自然と文化」九学会連合奄美本島共同調査委員会　1959年

4．永井昌文、三島格「奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古雑誌』50巻2号」1964年

5．『笠利町郷土史』笠利町　1973年

6．中山清美「名瀬市の先史学的所見」『薩琉文化』　8号南日本文化研究所　1976年

7．笠利町教育委員会「サウチ遺跡」「笠利町文化財調査報告書2」1978年

8．笠利町教育委員会「笠利町高又遺跡」「笠利町文化財調査報告書2」1978年

9．笠利町教育委員会「宇宿貝塚」「笠利町文化財報告書3」　1981年

10．中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』17、18号　1981年

11．笠利町教育委員会「宇宿港遺跡」「笠利町文化財報告4」　1981年

12．中山清美「先史時代の装飾品、奄美の島じま」『郷土のくらしと文化』新星図書出版1981年

13．中山清美「奄美における弥生時代相当期の資料紹介」熊本大学『赤れんが』創刊号　1981年

14．笠利町教育委員会「ケジ遺跡、コビロ遺跡、辺留窪遺跡」「笠利町文化財報告書5」　1983年

15．中山清美「兼久式土器について」『南島考古』8号　1983年

16．笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」「笠利町文化報告書7」1984年

17．中山清美「フィリピン、バタン島調査記」『笠利町歴史民俗資料館報』館報第2号　1984年

18．鹿児島県教育委員長「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32、1985年

19．笠利町教育委員会「城遺跡、下山田遺跡、ケジⅢ遺跡」
笠利町文化財報告書8　1986年

20．鹿児島県教育委員会「ケジⅠ、Ⅲ遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38、1986年

21．鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39、1986年

22．鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡（第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ遺跡）」

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42　1987年
23. 中山清美「奄美のグスク」『日本考古学論集」9号、古川弘文館　1987年
24. 中山清美「韓国調査記」『笠利町歴史民俗史料館』館報　第5号　1987年
25. 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡（第Ⅱ遺跡）」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書46　1988
26. 鹿児島県教育委員会「土浜ヤーヤ遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47　1988年
27. 中山清美「面縄前庭式土器」『日本民族文化の生成』九州大学　永井昌文先生退官記念文集　1988年
28. 中山清美「グスク」龍郷町『奄美考古』創刊号　1988年
29. 中山清美「奄美大島における古墓」『奄美考古』創刊号　1988年
31. 田村晃一、中山清美他喜子川遺跡喜子川遺跡調査団　1988年
32. 中山清美「笠利町の先史時代」『南日本文化』22号　1989年
33. 中山清美「奄美大島の箱形石棺墓」『アジアの巨石文化』六興出版　1990年
34. 笠利町教育委員会「節田湊金久、万屋下山田遺跡」笠利町文化財報告書13　1991年
35. 中山清美「奄美大島における爪形紋土器」『奄美考古』2号　1991年
36. 中山清美『シンポジウム南島文学発生論』三一書房　1992年
37. 中山清美「奄美と先島」『日本の古代』角川書店

半島を東西に分けたこの“山脈”は“アマンデー”と呼ばれる「天孫降臨最初の地」として女神アマミコ・男神シニレクの二神が“シマ”づくりをしたという伝説がある。アマンデーの山にはこうした伝説を伝える碑があり、明治34年には節田地区民等によって石碑が建立されている。その他にも武運長久を祈る石碑も建立されており、この山が「天孫降臨最初の地」として、また神山として信仰されていることがうかがえる。

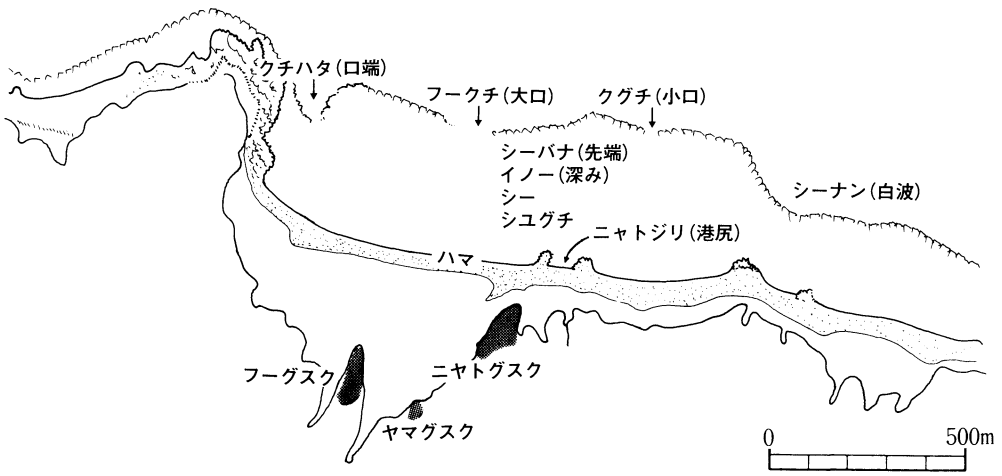
笠利半島に東西に分けた山脈は東海岸と西海岸に大きく分けられ、その地形から各集落の生活、文化にもそれぞれの個性が残っている。黒潮の真ん中にある奄美でも東側と西側の漁法にもちがいがある。リーフを中心にした漁法と干潟を利用した漁法などがある。東海岸は発達したリーフ、発達した砂丘、広がる後背温地からゆるやかに大刈山、淀

山へと続く地形、そしていくつかの小川が発達した砂丘を分断して海へと流れている。各集落は海岸よりの発達した砂丘の後方に位置している。現在は集落後方の低湿地とゆるやかな平地は畑地総合計画で整地され、大規模の畑地と化している。これに対して西海岸は大刈山、淀山、高岳から急峻に海に続く地形である。集落は山々に三方囲まれた形で谷間部に広い干潟を有し、前面（海側）が砂丘、そしてその砂丘のはずれに西海岸より比較的大きな川が流れている。現在の集落はこのように湾入した大小の地形を利用し、海岸側に限られている。これは奄美全体の特徴でもある。

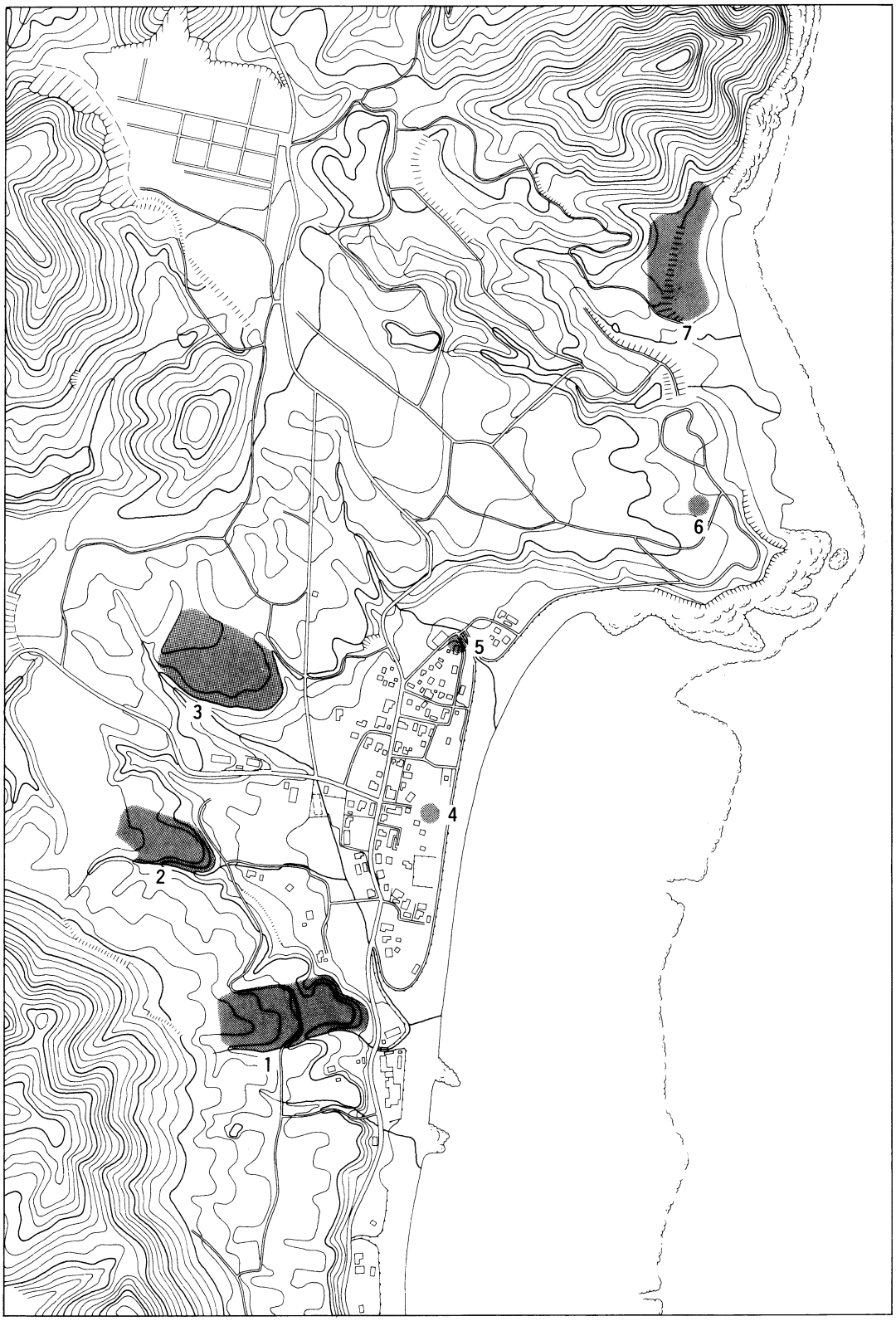
用安湊グスクは笠利半島の基部にあたり、南側を海に面し、北側が山手にあたる。集落は湊グスクの東側にあたり、湊グスクは現集落の西側はずれにあたる。発達したリーフと砂丘に恵まれ、集落東側にある明神崎砂丘からは弥生時代相当期の明神崎遺跡が位置する。

集落内には古い墓地が三ヶ所あり、青磁等も表採されている。用安地区は沖合いをリーフが囲むような状況でサンゴが発達しているため大きな外堀りの役割をなしている。大きな波もこのリーフに当り、海岸に来る頃にはさざ波の状態である。現在は海水浴場として観光地になっており、大島の海洋レジャー産業として人気を集めている。大きな外堀りの役割のひとつには船の出入口がリーフの切れ目に与るため、満潮時でもそれ以外の場所は小舟でも通れない。沖合のリーフはいつも白波が立っており、リーフ内への船の出入場所が限られている。グスクを形成するには格好の場所でもある。うまく地形を利用したグスクのひとつと言えよう。（第４図）

用安地区にはその他に山グスク・大（フー）グスクがある。山グスクは湊グスクより東側にあり、湊グスクと同様に集落の後方（山手）台地に位置し、大グスクは集落東側はずれの後方（山手）台地に位置している。（第５図）



第4図　海岸の名称



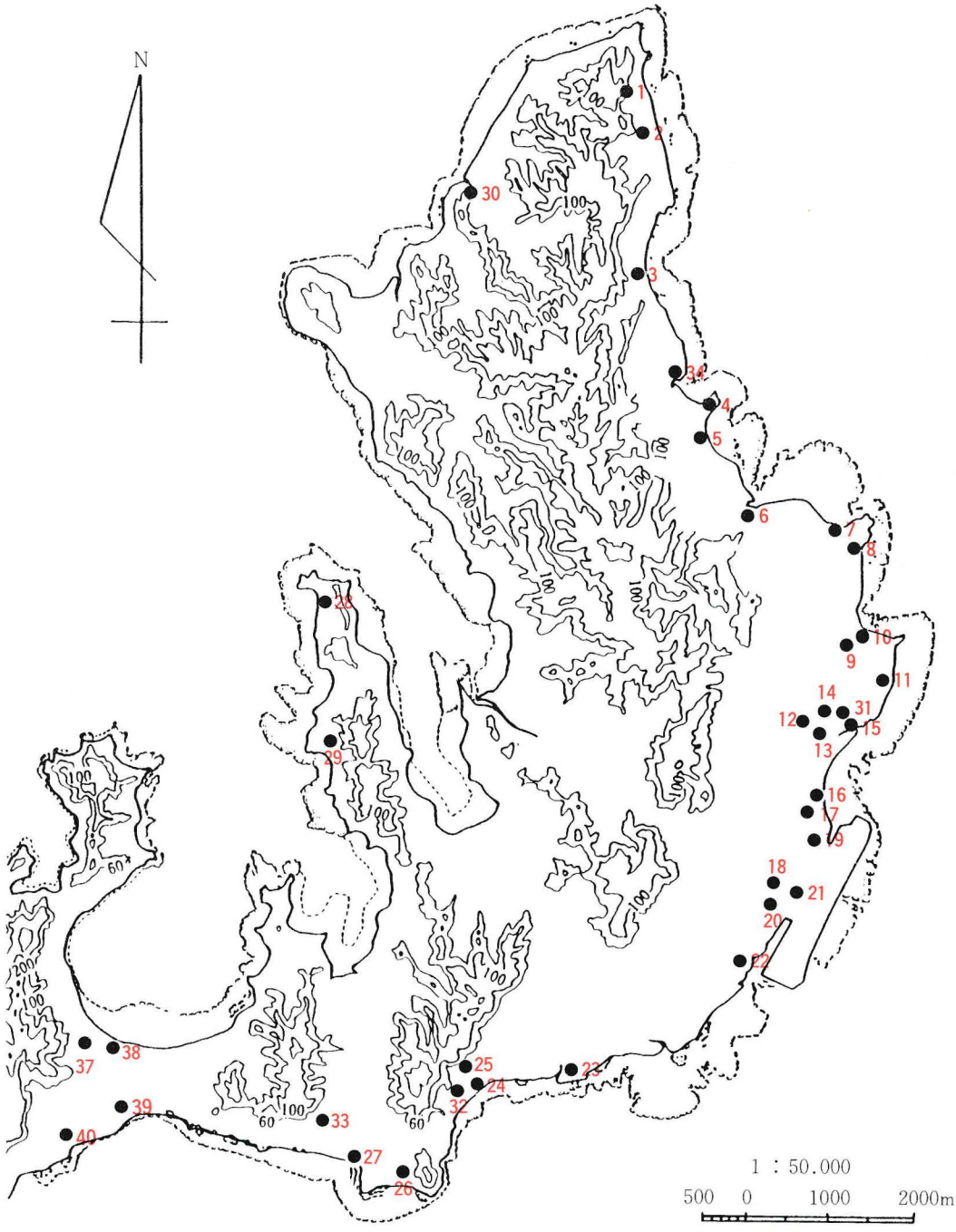
1．湊(ニヤト)グスク　2．ヤマグスク　3．フーグスク　4．古墓　5．古墓　6．古墓　7．明神崎遺跡

第5図　用安集落グスク分布図

これらのグスクは大グスクを中心に山グスク、湊グスクがセットになっていたものと考える。特に用安地区は台地が発達しており、その台地はいくつもの谷で切られており、自然の堀りになっている。大グスクは赤尾木から延びる山と用安から北に延びる山の谷間にあたり、この一体が台地状になっている。この台地のほぼ中央部分に位置し、太平洋と東シナ海が遠望出来る。大グスクのすぐ北側（山手）には大親神社が所在する。この神社は独立した形状をなし、一段高くなっている。

大グスクは南北が自然の谷で深く切られ、前方（東側）は急峻な崖になっており、完全な舌状台地になっている。舌状部分の先端には大きな自然石が積まれており、“石シロ”を思わせる。土塁も一部残っている。石が積まれている中央部分には小さな石が周囲に積まれ、白い砂が置いてあることから近年は拝所になっているようである。表採資料に玉緑口緑があり、湊グスクとは時期的にも差はないと思われる。一帯は現在サトウキビ畑になっており、グスクの残りも良好である。このように自然の谷間や空堀り等で築城するのは本土の鎌倉時代の城と共通する部分もあるが、今後九州の山城や韓国の山城・沖縄のグスクと大いに検討する必要があろう。

笠利町にはこの他に「おもろそうし」にも記されている「へるのぐすく」とある辺留グスクがあり、辺留グスクの北側にはウーバルグスクがある。大笠利集落のグスクであり、ここも用安の立地と類似する。龍郷町には戸口グスク・ヒラキ山グスクもあり、これも湊グスクのある用安集落と共通する。良港には2つないし3つのグスクが港を囲むように立地しており、これらを含めてグスクの位置と環境については広域的に考察する必要がある。



第6図　笠利町の遺跡分布図

第１表　　笠利町遺跡地名表 (1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	用見崎遺跡	笠利町用見崎	
2	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
3	用遺跡	笠利町用安良川	
4	辺留城遺跡	笠利町辺留良川	
5	辺留窪遺跡	笠利町辺留窪	笠利町文化財報告 No.6
6	コビロ遺跡	笠利町須野コビロ	〃
7	あやまる第２貝塚	笠利町須野大道	〃 No.9
8	あやまる第１貝塚	笠利町須野	
9	喜子川遺跡	笠利町松ノト	笠利町文化財報告 No.13.14
10	マツノト遺跡	笠利町松ノト	〃 No.17
11	土盛遺跡	笠利町土盛	
12	宇宿小学校遺跡	笠利町宇宿	
13	宇宿高又遺跡	笠利町宇宿高又	笠利町文化財報告 No.2
14	宇宿貝塚	笠利町宇宿大龍	〃 No.3 国指定
15	宇宿港遺跡	笠利町宇宿港	〃 No.4
16	万屋遺跡	笠利町万屋	
17	万屋下山田遺跡	笠利町万屋下山田	笠利町文化財報告 No.16.No.12
18	万屋泉川遺跡	笠利町万屋泉川	
19	ケジ遺跡	笠利町万屋ケジ	〃 No.6
20	長浜金久第２貝塚	笠利町長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書 No.32
21	長浜金久第１貝塚	笠利町長浜金久	〃
22	ナビロ川遺跡	笠利町和野ナビロ川	
23	立神遺跡	笠利町節田	
24	土浜遺跡	笠利町土浜	
25	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	笠利町土浜イヤンヤ	1973年三島格、永井昌文調査
26	明神崎遺跡	笠利町用安入瀬	
27	用安遺跡	笠利町用安入瀬	
28	サウチ遺跡	笠利町喜瀬字サウチ	笠利町文化財報告 No.1

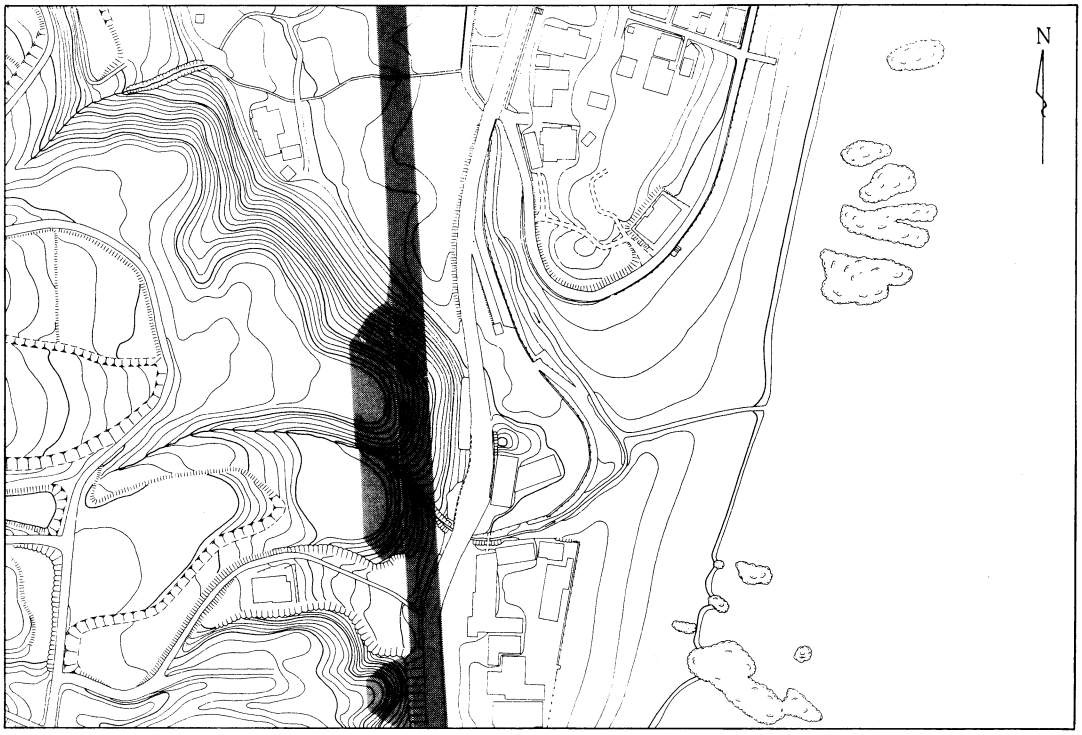
第2表　笠利町遺跡地名表 (2)

番号	遺跡名	所在地	備考
29	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬字鯨浜	
30	佐仁遺跡	笠利町佐仁	
31	宇宿貝塚東区	笠利町宇宿	笠利町文化財報告 No.18
32	土浜ヤーヤ遺跡	笠利町土浜	鹿児島県教育委員会報告書 No.47
33	湊城遺跡	笠利町用安	
34	笠利ウーバル遺跡	笠利町笠利ウーバル	
35	宇宿戦浜遺跡	笠利町宇宿	笠利町文化財報告 No.15
36	節田湊金久遺跡	笠利町節田	〃 No.16
37	赤尾木保育所遺跡	龍郷町赤尾木	
38	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
39	ウフタ遺跡	龍郷町赤尾木ウフタ	熊大考古学研究室活動報告 No.12
40	手広遺跡	龍郷町手広	

〈地名表作成、奄美文献〉

1．三宅宗悦　「南島の先史時代」『人類学先史講座10』雄山閣　1941年
2．河口貞徳　「南島の先史時代」『南方産業科学研究報告』第1巻2号　1956年
3．国分直一・河口貞徳・曽野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利宇宿貝塚発掘報告」『奄美の自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会　1959年
4．永井昌文・三島　格「奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』2号　1964年
5．『笠利町郷土誌』笠利町　1973年
6．中山清美「名瀬市の先史学的所見」『薩琉文化』8号　南日本文化研究所　1976年
7．笠利町教育委員会『サウチ遺跡』笠利町文化財調査報告書　1978年
8．笠利町教育委員会『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告書2　1978年
9．笠利町教育委員会『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書3　1979年
10．中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』17・18号　1981年
11．笠利町教育委員会『宇宿港遺跡』笠利町文化財報告書4　1981年
12．中山清美「先史時代の装飾品、奄美の島じま」『郷土のくらしと文化』新星図書出版　1981年

13. 中山清美「奄美における弥生時代相当期の資料紹介」『赤れんが』創刊号　熊本大学 1981年
14. 笠利町教育委員会『ケジ遺跡･コビロ遺跡･辺留窪遺跡』笠利町文化財報告書5　1983年
15. 中山清美「兼久武土器〔Ⅰ〕」『南島考古』8号　1983年
16. 笠利町教育委員会『あやまる第2貝塚』笠利町文化財報告書7　1984年
17. 中山清美「フィリピン、バタン島調査記」『笠利町歴史民俗資料館報』第2号 1984年
18. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32　1985年
19. 笠利町教育委員会『城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡』笠利町文化財報告書8　1986年
20. 鹿児島県教育委員会『ケジⅠ･Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38　1986年
21. 鹿児島県教育委員会『泉川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39　1986年
22. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書12　1987年
23. 中山清美「奄美のグスク」『日本考古学論集』9号　古川弘文館　1987年
24. 中山清美「韓国調査記」『笠利町歴史民俗資料館館報』第5号　1987年
25. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡（第Ⅱ遺跡）』鹿児島県埋蔵発掘調査報告書46 1988年
26. 鹿児島県教育委員会『土浜ヤーヤ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47　1988年
27. 中山清美「面縄前庭式土器」『日本民族文化の生成』永井昌文先生退官記念論文集1988年
28. 中山清美「グスク龍郷町」『奄美考古』創刊号　1988年
29. 中山清美「奄美大島における古墓」『奄美考古』創刊号　1988年
30. 中山清美「龍郷町の先史時代」『龍郷町史』　1988年
31. 田村晃一・中山清美他『喜子川遺跡』喜子川遺跡調査団　1988年
33. 中山清美「奄美大島の箱形石棺墓」『アジアの巨石文化』六興出版　1990年
34. 笠利町教育委員会『節田湊金久・万屋下山田遺跡』笠利町文化財報告書13　1991年
35. 中山清美「奄美大島における爪形紋土器」『奄美考古』2号　1991年
36. 谷川健一・山下欣一編『シンポジウム南島文学発生論』三一書房　1992年
37. 中山清美「奄美と先島」『日本の古代』角川書店　1991年



第7図　バイパス路線計画図

第8図　湊グスク周辺地形図　　S＝1：1,000

第2節　遺跡の概要

湊グスクは字名で残っているだけでこれまでグスクの存在さえ知られてなかった。それにくらべ与湾大親は有名で墓地も残っており、人々の信仰も根強いものがある。

湊グスクはニヤトグスクと呼ばれており、フウグスク、ヤマグスクとともに古見の港湾を遠望することのできる台地を選び防衛を固めたのではないかと笠利町誌に記されている。

与湾大親の墓碑はこのニヤトグスクの洞窟にあったとされている。ニヤトグスクと与湾大親は同時代的に記されている。これまでの与湾大親とニヤトグスクについては下記のとおりである。

ニヤトグスク（湊グスク）

笠利には大屋子職（おおよそ1537年頃）が笠利、宇宿、喜世の三か所が配置され、当時笠利はこの三か所を中心に行政区画が行われた説と宇宿と喜世の二分画されていたという二説がある。与湾に大親と呼ばれていたことは当時本土から渡来した「ガリヤ族」の侵攻が激しいので喜世の大屋子がその勢力と対抗する必要から前進基地として、古見の港湾を遠望することのできる与湾に喜世から居を移し、ニヤトグスク、フウグスク、ヤマグスクなどの用地を選び、防衛を固めたのではあるまいか。というのが笠利町誌で記されているものである。いわゆるニヤトグスク、フーグスク、ヤマグスクは喜世の大屋子の出城的なものであろうということである。

与湾大親

与湾大親については奄美大島史や大奄美史等などで記述があるが、笠利町誌にはニヤトグスクと呼ばれる丘陵の横穴の洞窟があり、古老はこれを一族の墓所であるとして紹介している。以下笠利町誌より与湾大親についての原文をそのまま紹介する。

大奄美史には、尚清王の与湾大親征伐を、次のように描写している。

「大島における首長らの割拠闘争は、琉球の支配を受けるようになってからは、自然鎮定したとはいうものの、それは琉球統治の初期だけで、その余波はなおこの時代にも存続して、彼らのあつれきは依然としてやまなかった。その一人に笠利村の用安に住んでいた与湾大親五郎という者があった。その大親と称するところから見ると大島の首長の中から、特にこの職に取り立てられたのか、それとも王の命によって琉球から任命されて来たのかはっきりしないが、とにかく第1回の大島討伐は、この与湾大親に関するものであった。ちょうど喜界島討伐を距(さ)る71年、御奈良天皇の天文六年（1537）の春、尚清王の時である。これよりさき、大島には数名の大親を置いてあったが、その中の一人が与湾大親である。資性忠孝至純にして、善に励み民をあわれんでいたが、他の同僚の首長ら皆奸悪にして常に与湾と仲が悪かった。或る年、入貢の時中山に登城して、与湾

大親むほんの心あり、速に誅せざれば亦制し難からんとざん訴した。大島は海を隔つること遠く、虚実弁じ難かったので王遂に之を信じこの年、兵を発して与湾を討たしめた。王師上陸するを見、大親天を仰いで嘆息し“吾罪なくして死に就く、ああ吾を知るものは天あるのみ”と自ら城に火を放ち、くびれて死んだ。琉軍その子糠中城をとりこにし、戦利品を載せて帰った。その後、王は与湾の無罪であったことを知って大いに悔悟せられ、罪滅ぼしに中城を厚く用いたという。この子孫代々重職に任じて功労多く、三司官（琉朝の最高職）を授った者だけでも20人を算する。馬氏小禄　与那原　宮平、金武等名乗に“良”の字を用いるはすなわちその後裔である。琉球の瀬長氏系譜に“幸地親方元昌事、馬氏小禄親雲上（おやくもいーペーチン）始祖与湾大親之嫡子糠中城掟親雲上次男の子に御座候云云”とある。

真境名安興氏の“沖縄一千年史”を見るに“大島与湾大親の一族たる馬氏の馬姓由来記を按ずるに与湾大親に二男一女あり、長は即ち糠中城にして、此人は初めてぬか味噌を作りて貧民に施し与えしに依り、世人其恩徳に感じて糠中城と呼べりという。次男は中城仁屋といい、大島に帰りて父与湾大親の家を継ぐ。女は玉城間切百名村へ嫁したりという。而して中城の長男は馬良詮浦添親方良憲と称し、尚元王時代の三司官にて、初めて家門繁昌の端を啓けり、与湾大親の郷貫に就きては古来二説あり、一は大島の産なりといい、他は君命を蒙りて任に大島に就きしものなりともいう。而して其祖先の墓が毛志里大衆カンダノアモシラレとして沖縄の北谷村屋良に在りと云えば、或は沖縄より大島に渡行せしものなるかも知るべからず。記して後考を俟つ。”とある。」

以上は、大奄美史の述べるところであるが、坂口徳太郎氏の「奄美大島史」にも、南島記事によればとして、略同様なことが記述され、更に「中山世譜」の原文を摘録されている。

与湾大親父子とガリヤ

尚清王はいったいどんな経緯で与湾大親征伐の軍を動かしたのか、「大奄美史」の記述をかりてもう少し詳しくたどってみよう。

与湾大親は資性豪邁にして忠孝の心厚く、慈悲に富み、殊の外士民をいたわり慈しんだので、士民は心から服従し、他の間切からも続々徳を慕ってその配下に来り属する有様であった。そのため他の首長らはかねてからそれを嫉ましく不快に思っていた。中でも古見間切の首長「我利爺（ガリヤ）」はごう慢不遜で、ひたすら自分の勢力を増進することだけに心を砕いていたから、自然与湾大親の声望をにくむこと甚だしく、どうにかして彼をけ落そうとたくらみ、ひそかに他の首長らと話してみたが、与湾大親の子糠中城が武勇並ぶ者がなく、十人張りの強弓を引くほどの豪傑であったから、皆おそれて「我利爺」の計画に賛成しても、いざやるとなると戦う勇気のある者はいなかった。

「我利爺」は、しかたなく、日に日に増す嫉妬と憎悪の炎をおさえかねて、悶々の情を抱いていたが、このようすを見て部下の一人が彼にはかりごとを進言した。「兵力をもって与湾大親を討ち取ることは、とうてい不可能である。殊にその子の糠中城は、稀代の豪傑であるからうっかり手出しすれば、かえって大きな禍いをこうむるだけである。与湾大親を滅ぼすには、まず中城を除く必要がある。しかし力づくではとてもかなわないから、色仕掛で彼をおびきだして、だまし討ちにするより外に方法はない。」と「我利爺」はこの計画を非常に喜んで、早速自分の娘、幸地がたぐいまれな美人であることをさいわいに、場内に射的場をもうけ、50歩をへだてて14の的をつくり、14の矢でこの的を全部射あてた者に娘を与えると、島内くまなくふれだした。島の若者で、弓を取るほどの者は皆集まったが、誰も娘を自分のものにすることはできなかった。

たまたま糠中城はこのうわさを聞き、かねて美人幸地の高い評判を耳にしていたので、そんな計略があることも知らず、「我こそは14の的を射当て、その美人を獲よう。」と勇みたって「我利爺」の城に赴いた。「我利爺」は自分のはかりごとの成功を喜び、真心から歓迎するようによそおい、娘に中城に酒をすすめさせ、厚く饗応させた。ところが幸地は中城が七、八尺にあまる偉丈夫でありながら、色白く眼涼しくしておかしにくい威厳のうちにも無限の優しみをたたえている姿を見て、深い尊敬と愛慕の情にうたれ、どうぞこの人が14の的を射当てて、自分の婿になってくれるように、心の中で祈った。 そのうち酒宴も終り、射的場に案内された中城は持ってきた強弓に大矢をつがえ、ねらいたがわず次々に13の的を貫き、残るは一筋の矢と14番目の的だけである。一段と心を落ち着けて、10人張りの弓を満月のように引きしぼった。その姿は凛々しくも雄々しかった。そしてうなりを生じて弦をはなれた矢は、ねらいたがわず的の真中を射貫いた。その手並の見事さに敵の中からも、嵐のような拍手が起こった。然るに同時に的のかげから、けたましい女の悲鳴が聞こえ、血煙りがさっとほとばしってひきまわした幕を紅に染めた。人々が驚いてかけつけると、そこに胸元を射られた幸地が倒れていた。「我利爺」はあまりのことに我を忘れ、娘をだき起こして矢を抜こうとしたが、幸地は確と矢をおさえ、「父上の此の度のおはからいは、妾のために思う御心からとばかり思っていましたが、聞けばそうではなく、妾を囮に中城の君を討つための由、浅ましいことです。妾はもう心の中で中城の君に許しています。されば心に許した君に従えば父上に不幸となり、父上に従えば女の道がたちません。生きてこの苦しみをなめるよりは、仮りにもせよ夫と許した人の矢面に立って命を捨てることこそ本望です。どうぞ妾の心をふびんと思われて、悪心をひるがえして両家の和親をおはかり下さいませ。これが妾の最期のお願いです。」と息もたえだえに語り終って、おののく両手をさしのべ父と中城の手を握ったまま息絶えた。

中城は始めて、「我利爺の奸計を知って驚きかつ憤ったが、このいたたましい幸地の最期とその真情にうたれ、十分「我利爺」を許す気になったが、「我利爺」はかえって娘のいまわの言葉によって、自分の計略がばれたことを憤り、「今はこれまで」と、合図の口笛を鳴らした。かねて用意して、物かげにひそんでいた部下たちが、中城を取り囲んだ。中城は「我利爺」の卑劣なやり方に、怒り心頭に徹し、かたわらにあった大木を根こそぎ引き抜いて風車のように振り廻し、当るを幸いけちらし打倒して血路を開き自分の城にのがれ、手兵を引き連れて、取って返し「我利爺」の城に攻め寄せた。ところが「我利爺」は戦わずに降伏したので、その不心得を戒めて許した。

「我利爺」は、その後ますます与湾大親父子に怨をいだき、仲間を勧誘して琉球王に上貢の際、尚清王に与湾大親が謀叛の心をいだいて着々と準備を進めているから、今のうちに討たなければ大事に至るであろうとざん訴した。海を隔てた遠い島のことであるから、事情がわからない王は、「我利爺」らのざん訴を信じ、直ちに討伐の軍勢を向けたというのである。

「ガリヤ」とは何者か

与湾大親を悲劇の人として自滅させた張本人であったといわれる、古見間切の首長「我利爺」とは何者であったか。このことについても、大奄美史に記述されている以外は、記録も口碑も残っていないようである。

大山麟五郎氏は「ガリヤ」についての研究考証の中で、

「奄美群島における階級的な支配者の出自の第三の類型は“グリヤ”あるいは、“ゴリヤ”などといわれるものである。これは端的にいえば本土から渡来したアジ（領主）である。」として詳細な考証をされ、

「伝説のなかで与湾大親をおとし入れ、のちにばれて琉球王に討たれることになる悪役は、古見間切の首長我利爺ということになっている。この首長我利爺が伊津部勝（古見地区の中の部落名）のアジ屋敷の主とどういう関係にあったか定かでない。おそらくこのアジは我利爺よりもっとさかのぼった時代の首長であろう。しかし私がここでそれよりも興味をもつのはこの“我利爺”という名前である。これははたして単に普通の人名と見のがしていいのか、実は固有名詞として固定してしまった普通名詞という素性がかくされているのではないか。」として、グリヤ、ゴリヤ、グラル等の言葉にふれ、次のように誌されている。

「ヤマトのいくさ大将に緑のある所には、共通な特徴がある。水田地帯であるか、良港であるか、大体この双方をかねている。周辺に“ゴリヤ”系統の地名か人名が残っている場合が多いことも、もう一つの特徴である。

平家の伝説に関係のある、大島戸口、浦上、諸鈍、喜界島の川嶺、沖永良部島のグラ

ル（後蘭の字をあてる。）などが、それである。大島の名柄の場合は、攻められるのは名柄ハチマン（倭寇か？）といういくさ大将で、攻めたのは琉球王軍、徳之島の伊仙の場合は、守ったのはゴランのアジで、攻めたのは唐の軍である。

大美川（戸口）流域の水田地帯の戸口に残る地名は、戸口ゴリヤである。これはゴリヤ城（ぐすく）ともいい、旧藩の地図にも、ゴリヤ城と書いてある。戸口ゴリヤという水田中の岡と矢合わせをしたという仲勝ゴリャという小山も、仲勝寄りの水田の中にある、諸鈍では、山手の里を守ったのが、ナングモリバルというノロのナングモリを中心とした血族集団、攻めたのが琉球王軍を援軍にたのんだグリヤバルである。攻めあぐんだグリヤバルの一党が、ナングモリの主宰するオホリの祭儀中、その祭司長になっている神女ナングモリの不意をうって殺したと伝えられている。このグリヤは、諸鈍の浜手のカネク（金久）によった一党である。民話はグリヤの出自を伝えていないが、金久を地盤にした新興集団で航海に関係のある（琉球主との関係もそこから生じた。）一党で、しかもこの島の宗教儀礼をおそれない者である。そして名称のグリヤとならべると、島外、おそらく本土に関係のある集団との解釈に傾かざるをえない。

平家伝説を附近にもつ喜界の水田地帯川嶺の小字名には、グリヤとかゴリヤのつく地名が三つある。

沖永良部の後蘭（グラル）のグスクをつくったという、後蘭孫八はあまりにも有名で、琉球北山王の子の沖永良部世之主の四天王の一人である。“世之主かなし由緒書”によれば、“九尺あまりの大男で……、多分、日本よりの落人。”とある。かれの本拠グラルは、この島一の水田地帯である。

グラル孫八が積みあげたるグスク
永良部三十祝女（みそノロ）遊び所。

（民謡）

名瀬市古見の大川水系水田には、地名でゴリヤ川（名瀬勝小字名）、人名で古見我利爺という酋長が登場する。この人物は、説話では悪人にされている。笠利の与湾大親を琉球王にざん言して討たせた後、悪業がばれて、自分も琉球王に討たれることになっている。この人の出自はわからない。与湾大親は大島の地の人ともいわれるので、彼は島外の人だったかも知れない。

これらの説話、地名にでてくる。ゴリヤ、グリヤ、ガリヤ・グラル・ゴランの背後からは、島外と関係のある“いくさ大将”という共通のにおいがする。その島外は、本土くさい。

唐軍に攻められたという徳之島のゴランのアジの例も、唐軍を倭寇と考え、ゴランという地名はあとでその倭寇が支配者になってから生じたもの、と考えればつじつまが合

う。倭寇には、中国人がはいっていたからである。

ヴァスコ・ダ・ガマは、マラッカに東方からくる航海者の中に、中国人・ジャワ人とならんで、ゴーレスがいたことを伝えている。16世紀初頭のポルトガル王の臣の航海将軍アルブケルの伝説によれば、ゴーレスの住む国はレケア（琉球？）で、その皮膚は白く、衣服は頭布のない法衣のごとく、常に細身の大小二刀をたばさみ、勇敢にしてマラッカにおいて畏敬される云々、とある。

このゴーレスには、定説がない。新村出博士の高麗人説に組みする後継者は出ないようであるが、藤田豊八博士の“ゴーレスは、倭寇を内容とする西部日本人なり。”秋山謙蔵・小葉田淳両教授の“ゴーレスは、琉球人なり。”は、いずれも有力である。沖縄では安田延氏が琉球人説、稲村賢敷氏が“日本人全部の名称”と、こちらも両説がある。

稲村氏は、宮古諸島に多い童名“ガーラ”は、倭寇の子孫であることを表示する名前であると主張し、ガーラの語源は、日本語の頭（かしら）であることを立証するため、藤井時冬博士の日本商業史を引用しておられる。いわく、“当時支那では、倭寇の隊長について、日本甲螺（コーラ）と称して、畏敬した。……甲螺は、なお頭目というが如し。加志良、音甲螺に近し、故に、なまりの称したるのみ云々。”

そして稲村氏は、さきのゴーレスも、“日本人仲間でその頭目に対して頭（かしら）と称することから起り、次第に日本人全部の名称となったものであろう。”としておられる。

少なくとも奄美群島のゴリヤ系名称は、稲村氏の説で解釈する方が妥当であろう。同氏も、グラル孫八のグラルを一例にあげておられる。

伊波普猷氏は、“沖縄考”で、八重山や宮古の“かわら”（首長）は、恐らく頭（かしら）の義であろうとされている。室町時代のうつぼつたる気運のなかで、南方雄飛を考えた勇士たちや、戦乱の本土で志を失った亡命者たちが、この列島に上陸し、格段にちがった彼らの文化（ことに鉄文化）と武力で、この島々の水田地帯や良港のどこそこを押える小領主となった時、渡来者たち（その中には中国人部下もいたろう。）が、統領に対し、“かしら（日本人部下）”とか、コーラ（中国人部下）とよんでいたことが、島民の間にゴリヤ系名称を残したものと考えても、さして無理はなさそうである。」（名瀬市誌196ページ～199ページ）

以上、大山氏の論説をそのまま受取ると、「我利爺」は、倭寇くずれの本土から渡航してきた海賊の一味が古見地方で勢力を得て、古見地区のアジとなったものと見られ、古くから土着した与湾大親一族の既勢力と我利爺族、すなわち新興の豪族との勢力争いが、「与湾大親征伐」に発展したものと思われる。

以上のような与湾大親の説がいくつかあり、昨年は宇検村で古文書が発見され、与湾

大親は宇検村である。というようなことも発表しているが、第１章で延べたとおりである。

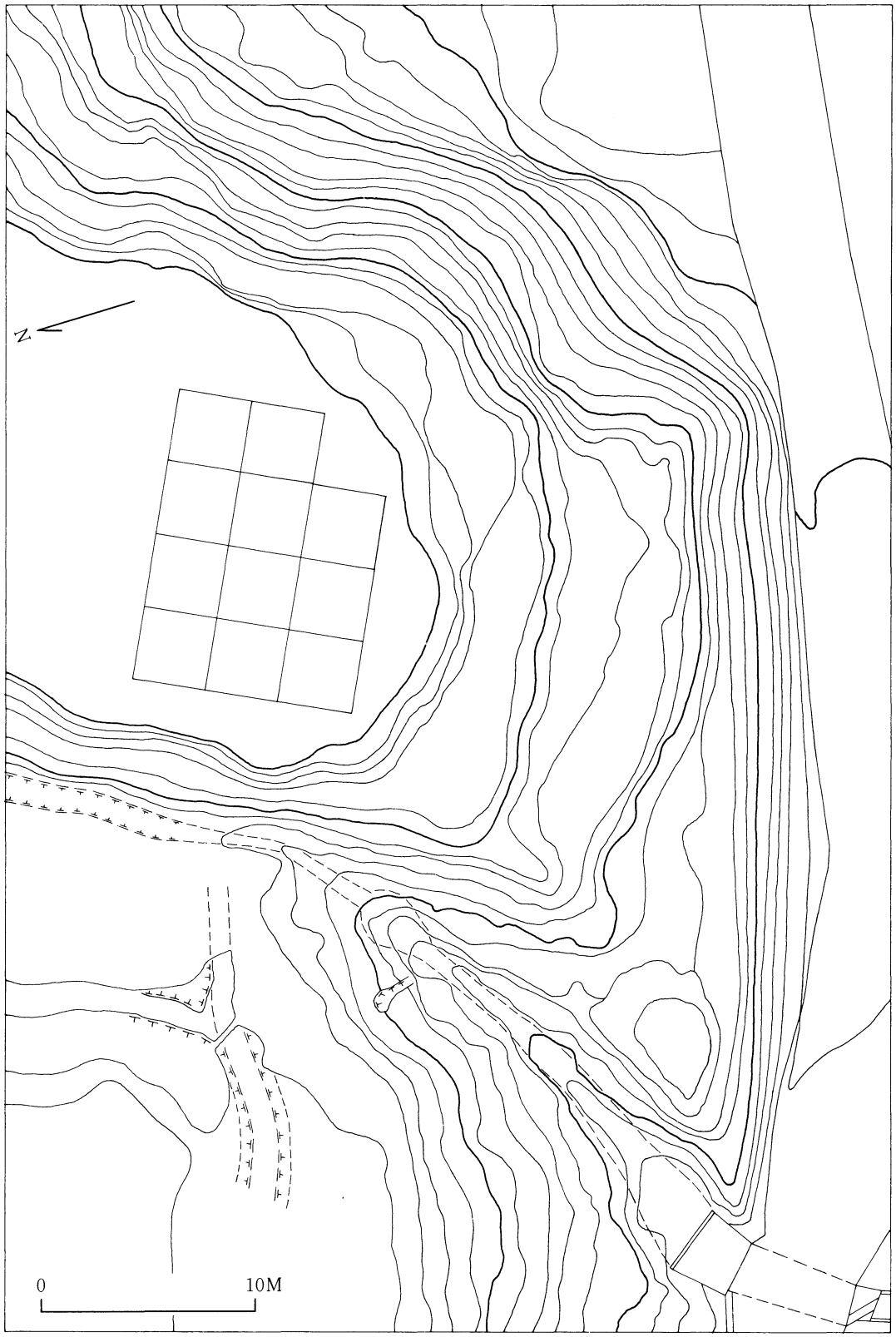
ニヤトグスク内にあったトフル墓は発掘調査では確認することが出来なかった。発掘調査で確認されたのはブルドーザーの爪痕と破壊された跡だけであった。これは笠利町誌にも当時の新聞記事にも記されている「本町の貴重な文化財を失ったことに悔やんでも悔やみきれないものがある。」と笠利町誌には記されており新聞記事では昭和45年６月28日、南海日日新聞にも調査されないままブルドーザーによって跡形もなくこわされたと強い論調で記されている。またこの当時（昭和44年）の新聞でも島の文化財が外部へ持ち出され奄美各地で文化財の流出が相出でいるとされている。いわゆるディスカバージャパンによる探険隊や古物商が横行していたのであろう。作家の島尾敏雄氏も「こどものころから伝統を大事にする心情が乏しいために起ることだと思う。大きくなってから関心を呼びさまされても、それはたいてい物質的な価値観しか持たない。住民に伝統への愛着が出てこないかぎり、文化財散逸の防止はムリな気がする」とコメントされている（南海日日新聞、昭和44年４月15日付）。

今回発掘調査が行われたのはニヤトグスクで、ニヤトグスクからは城郭やピット状遺構、鍛冶跡等が検出された。これらの遺構はいずれも本丸内からであり郭の部分からは検出されていない。

ピットは深さ約120センチ、直径約100センチとかなり大きな柱穴で四本柱を思わせる第14図のようにほぼ方形になり、物見やぐら的な建物と思われる。製鉄遺構は三ケ所発見されており、強い火力を受けている。近くには鉄滓等が出土しており、鉄の化工を行っていたと思われる。他に小さなピット群があるが、はっきりした形は不明である。

与湾大親のトフル墓があったとされる３の郭はグスク北側からブルドーザーが降りた跡があり、通り道をつくりながら３の郭まで降りてトフル墓のあったとされている場所を整地されていた。完全に消滅した状態である。

グスク全体の残りは比較的良好であるが、遺構等の残る本丸部分は畑地として整地されその後、サトウキビ等が植え付けられており、中央部分の残りは悪い。遺構はグスクの周辺部に残っている。ただし、グスクの地形はそのまま残っており、地形からグスク全体を考察することが出来る。出土遺物も青磁、白磁等が出土しており、大陸や沖縄と何らかの関連があるのはまちがいない。出土遺物から13世紀頃のグスクであり、フウグスク、ヤマグスクとの関連も強いと思われる。



第9図　発掘調査グリット設定図

第3節　層　　序

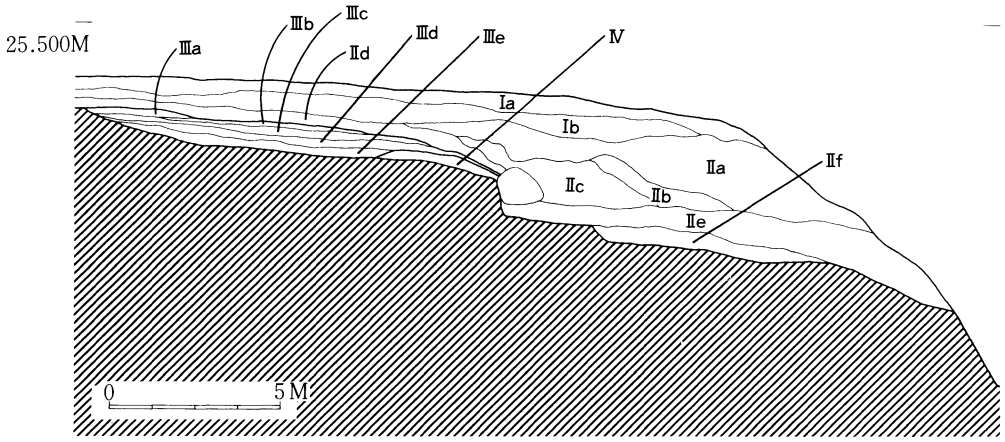
本グスクは南北セクションベルトを基本層序とした。このセクションはグスクの長軽のセクションである。

Ⅰa～Ⅱdまでは近年昭和30年代に畑地として整地されたということから基本的には撹乱層である。

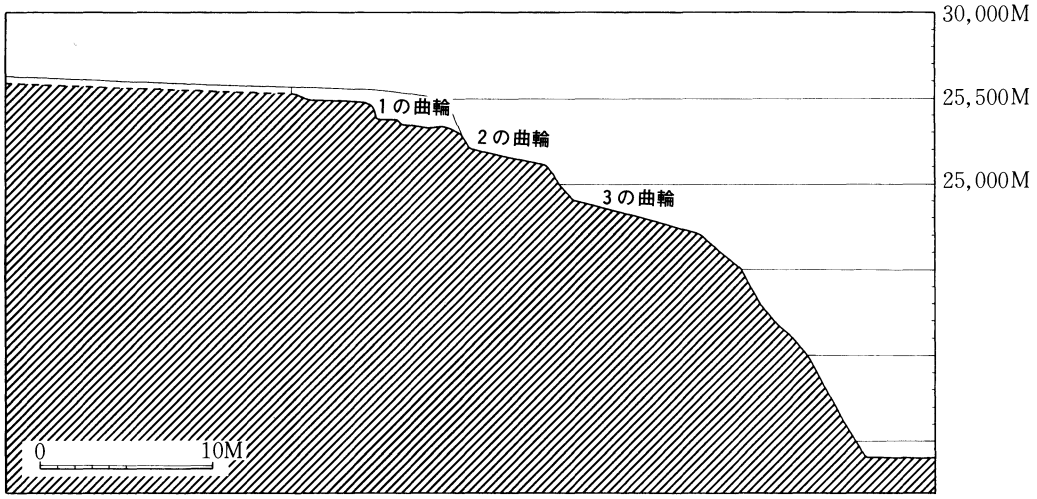
Ⅲa～Ⅲeまではグスク築城時の整地である。

Ⅳ層は郭の部分の貼り土である。

中央部分に円形状に撹乱があるのは畑地として整地した時にソテツが埋まっていた場所である。



第10図　基 本 層 序



第11図　湊グスク断面図

第Ⅲ章　湊グスク（ニヤトグスク）の調査

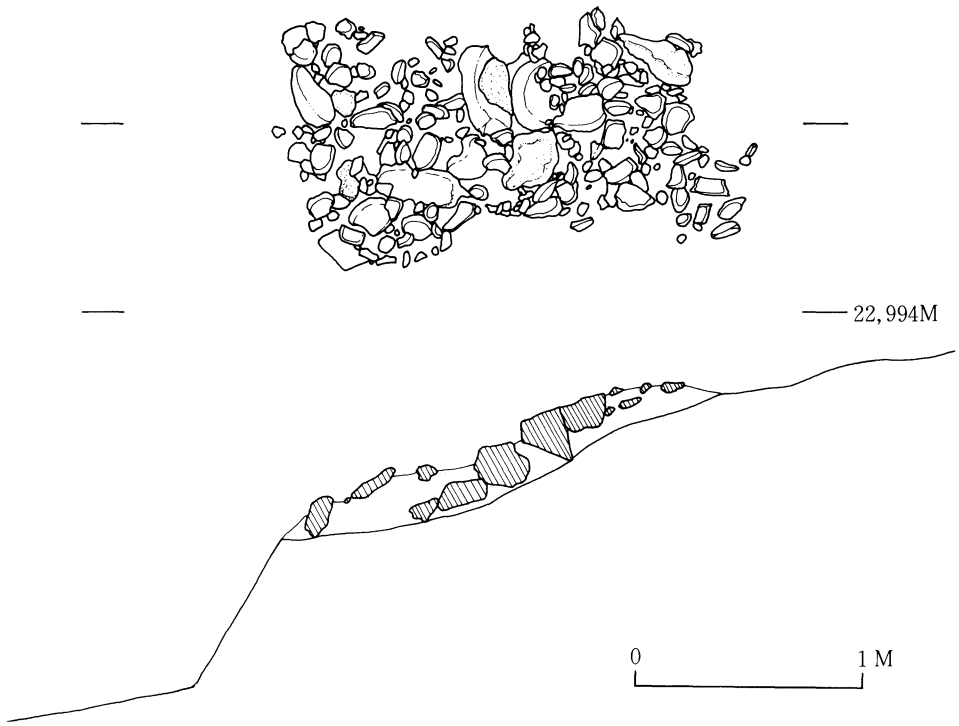
第１節　遺構

ニヤトグスクの発掘調査で建物跡、鍛冶跡、掘建て柱遺構、土坑等が検出され、グスクの構造的、機能的なものが把握できた。

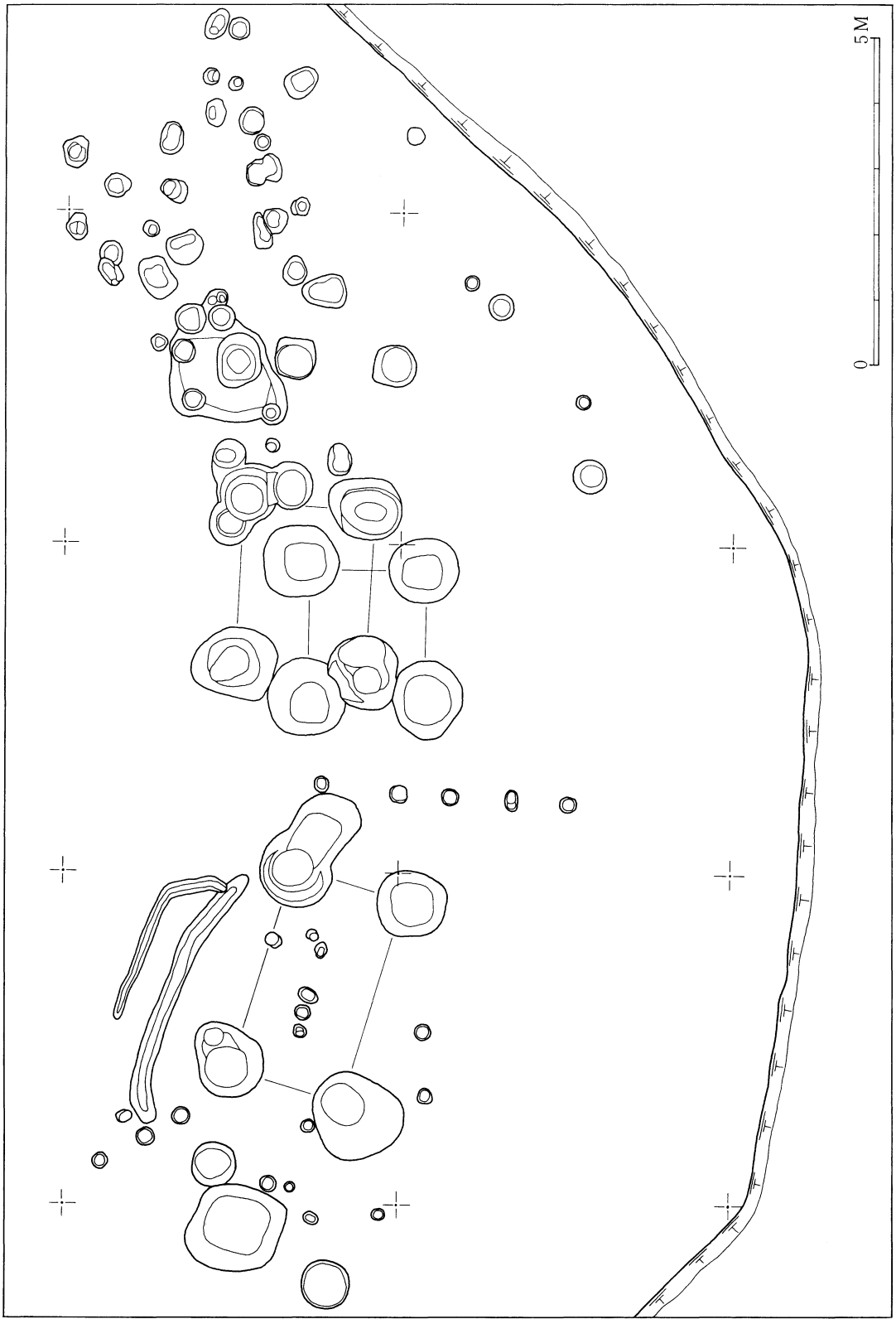
１．造　　成

ニヤトグスクの１の曲輪部分は平場として造成されている。全体的に本丸側から１の曲輪部分がやや傾斜しており、本丸部分を広げ、平場として造成しており、法面は粘土質で土留めをしている。部分的に土塁状に残っていることから小礫等を含めた造成が行われている。このような部分は地形が傾斜した部分に粘土質が入っていることから全体的に行われたと思われる。１の曲輪の法面は全体的に小石等が多く集められており、土留めとして強化されている。

２の曲輪部分は一部分だけ法面にサンゴや貝、石を積んだ跡がある（第12図）。階段と思われたが一段目に大きな石を並べ、その上に不規則にサンゴや石、貝を積めた状態である。土留めとして利用されていたと思われる。



第12図　土留め石とサンゴ



第13図　遺　構　図

2．四本柱（建物跡）

1の曲輪の先端部分に直径約1ｍ前後、深さ約1ｍの大きな柱穴が確認されて大きさがほぼ同じである。3ｍ×1.7m、1.7m×1.7m、2.3m×2ｍと長方形とほぼ正方形の建物跡があり、規模から通常の建物跡とは考えられず、高倉的な建物としての可能性が強い、1の曲輪の先端で海に向かっていることから物見やぐらとしての可能性も考えられよう。

1号建物跡

B・C－7区で検出された。東西のピット間は約3ｍ、南北約1.7mで東西間が長い方形になる。P1～P4のいずれもマージ層（地山）を掘り込んでおり、特にP2、P4は頁岩がノミ状の工具を使って掘られている痕も確認された。

東　西	南　北
P1－P2 3.1	P1－P4 1.7
P4－P3 3.15	P2－P3 1.85

第3表　1号建物跡計測表

2・3号建物跡

DEF－7区で検出された。2、3号は切り合い関係にあり、2号が3号に切られている。

2号建物跡は比較的整然としている。東西に2ｍ、南北に1.8mとほぼ方形に近い。P1は直径1.15m、P2は1.10m、P3は直径1ｍ、P4直径1ｍとピットの大きさもほぼ1ｍ強である。P1の深さは1.20m、P2は1.60m、P3は1.30m、P4は1.25mである。1号建物跡同様に地山を掘り込んでおり、鉄製のノミ状の工具痕が残っている。頁岩を掘り込んでおり、ピットの中は人が1人入って作業出来る大きさである。

東　西	南　北
P1－P2 2.1	P1－P4 1.8
P4－P3 2.0	P2－P3 1.8

第4表　2号建物跡計測表

3号建物跡は東西間が2.5m、南北2ｍとやや東西に長い方形である。P2はピットがいくつか切り合いになっているが、F・G区から検出されるピットとの関連があるものと思われるが不明である。

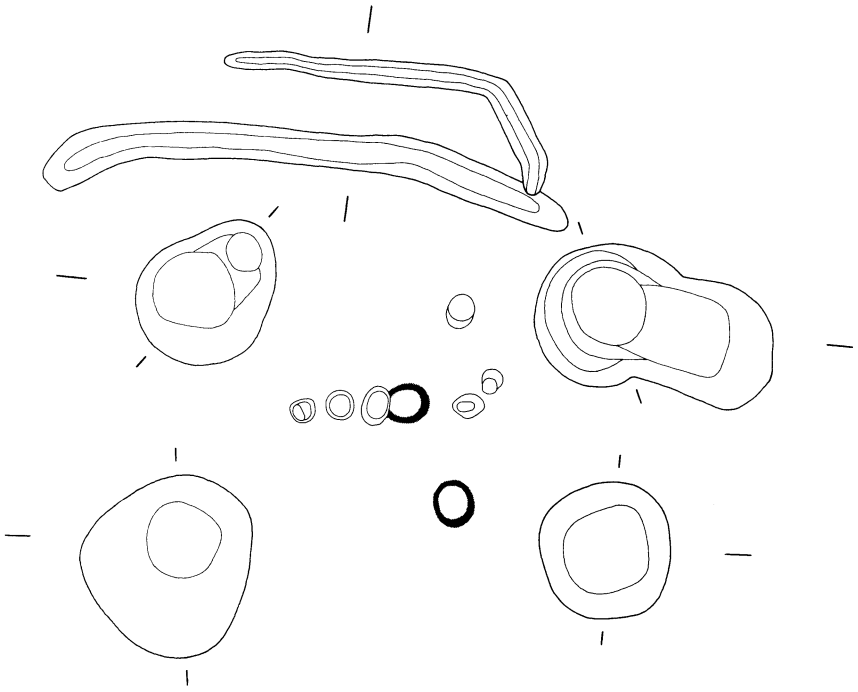
91は直径約1ｍ、深さ1.50m、P2は切り合いのためはっりしないが、約80センチ、深さ1.10m、P3は直径9.4m、深さ1.15m、P4は1.1m、深さ1.10mであるが、P4は2号建物跡のP1を切り合っている。

東　西	南　北
P1－P2 2.5	P1－P4 2.0
P4－P3 2.5	P2－P3 1.9

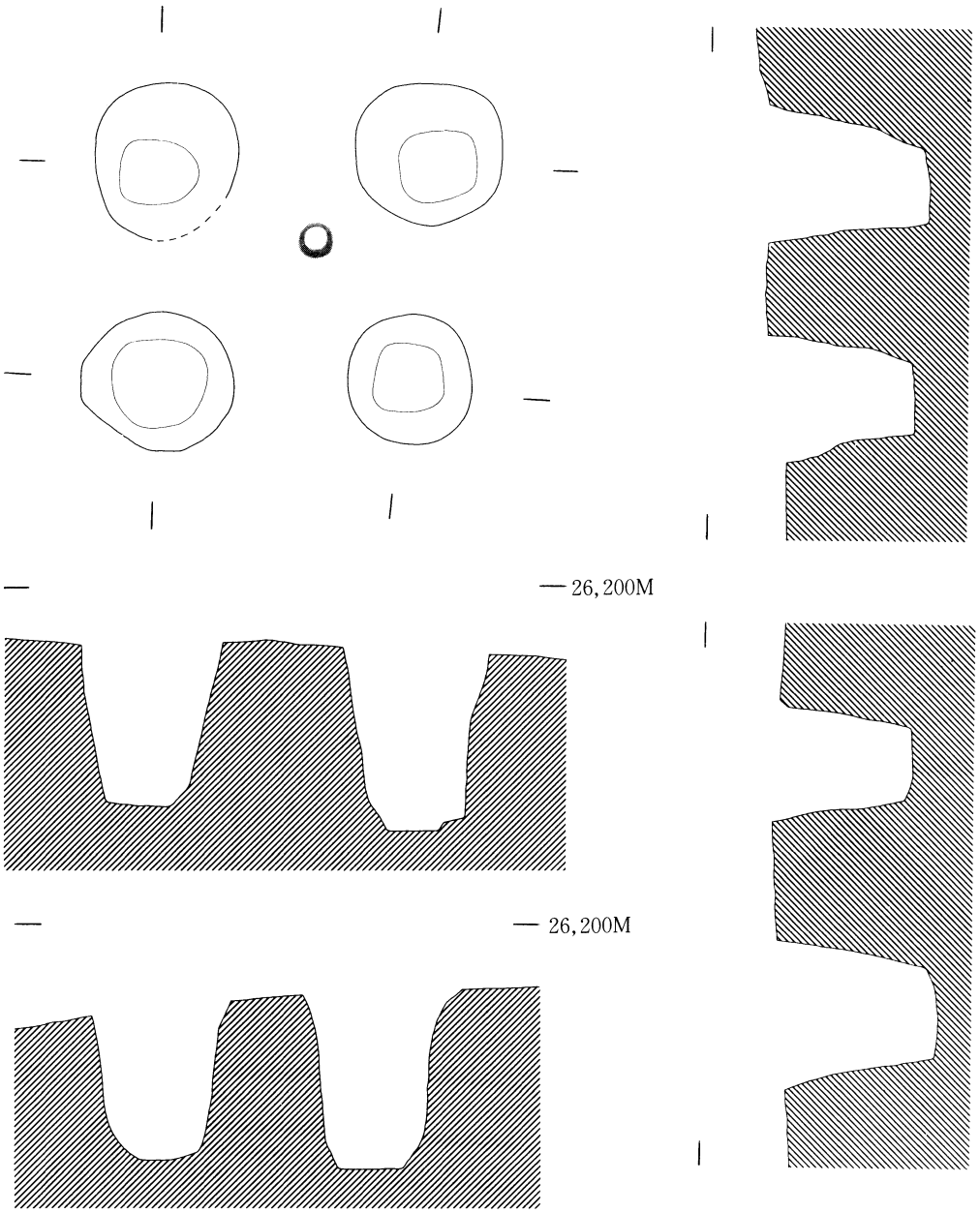
第5表　3号建物跡計測表

これらの3つの建物跡は大きなピットを掘り込んでサンゴや貝などをピットに入れて柱を固定させている。3つの建物跡が同時に建っていたというよりも2、3号で切り合っていることから3回にわたって建て替えられたものと思われる。

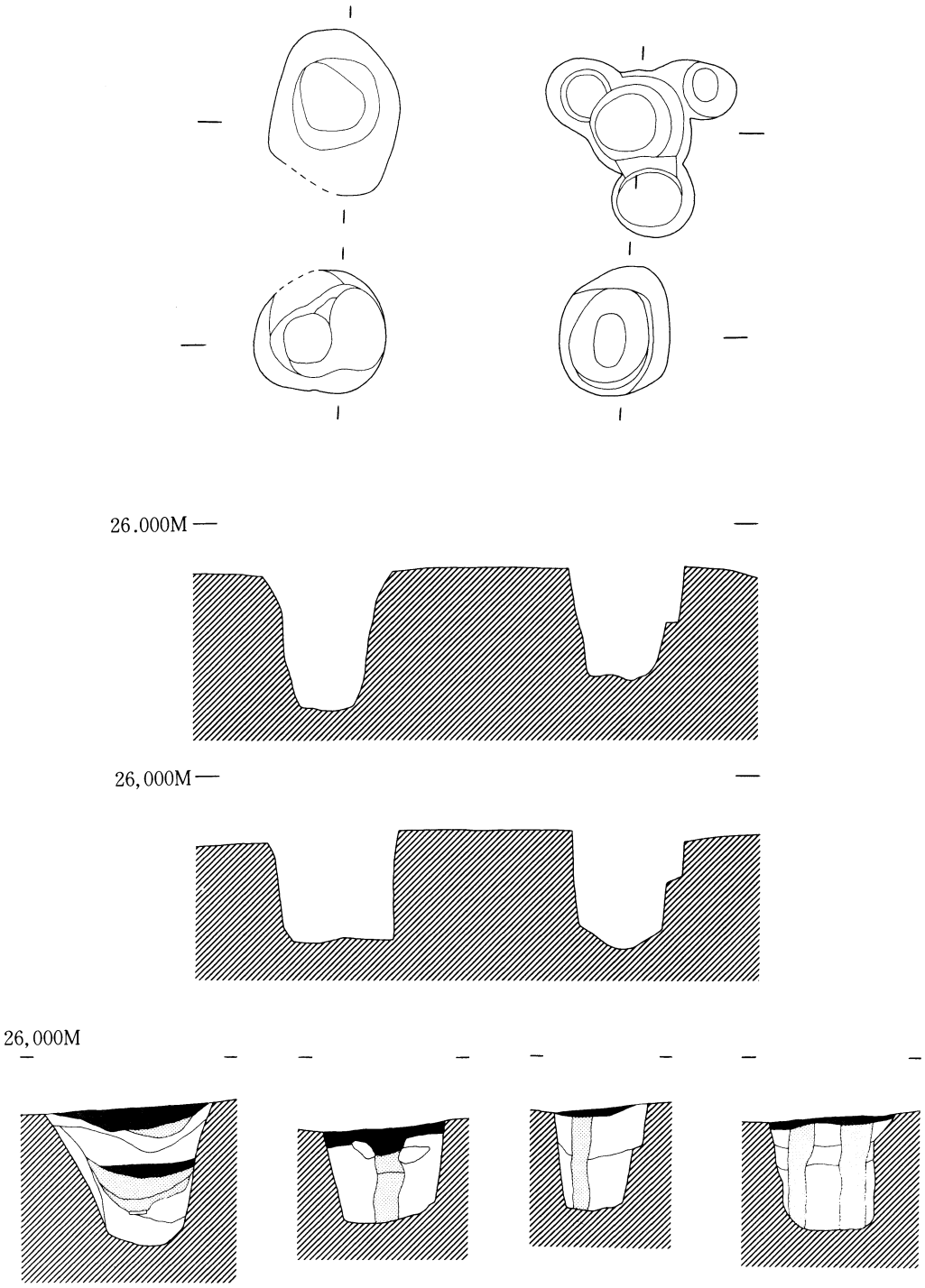
類似する四本柱では笠利町下山田Ⅲ遺跡（笠利町教育委員会、1988年３月）でもあるが下山田Ⅲ遺跡の四本柱（高床倉庫）は東西、南北の柱間がマージ層を掘り込んでおり、直径も約１ｍ、深さ１．２ｍと大きく、東西、南北の柱間も下山田Ⅲ遺跡出土の四本柱よりやや小型である。小型であるががっしりした感がある。台地上でもあり、見晴らしは良かったであろうが、季節風も強かったためであろう。



第14図　1号建物跡



第15図　2号建物跡



第16図　3号建物跡

3．棚列状柱穴群

Dラインにおいて5個のピットが南北に一列に並ぶ、直径約25cmの大きさで1の曲輪の先端までのびる。この1列だけで他に検出されてない。同様な列は下山田Ⅲ遺跡でも検出されている。

4．鍛冶跡

本グスクからは鍛冶跡と思われるものが2ヶ所確認されている。1号建物跡のほぼ中央部分から検出されたものを1号鍛冶跡、2号建物跡から検出されたものを2号鍛冶跡とした。

1号鍛冶跡は直径約30cmでマージ（赤土）部分が固く焼きしまった跡である。焼土の中央部分は鉄滓等が附着しており、灰色状をなしている。焼土西側には鉄滓がまとまって出土している。

2号鍛冶跡は直径約25cmで1号よりもやや小さい。2号はマージ部分が真赤に焼けて固っているだけで鉄滓等の出土はなかった。

このいずれも建物跡（四本柱）のほぼ中央部分から検出されており、建物跡と何らかの関連があるように思える。笠利町下山田Ⅲ遺跡においても鍛冶跡が確認されており、四本柱の近くから検出されている。グスクとしての機能的なものを考えるには一考すべきものと思われる。

近年沖縄においても同類のものが発見され、製鉄遺構として扱われていると沖縄県立博物館当真嗣一氏より御教示を頂いた。

グスクにおいてはこのような鉄製品を加工する程度の工房があり、クギ、ツリバリ、カマ等を修理したり、造ったりしていたと思われる。ただし、鉄製品の量は少量である。ほとんど二次加工され色々なものに使用されていたものと思われる。鉄はこのころから一般的に使われるようになり、各シマのアジ達が大開拓を行った時代であろう。よく民俗的な立場から奄美の鉄文化はグスク時代にはじまると言われるのもこの時代に鉄文化が一般的に使用されていたからであろう。ただし奄美に鉄が入って来たのは笠利町サウチ遺跡からフイゴの羽口等が出土し、すでに弥生時代には鉄が導入されていることが明らかになっている。

谷川健一氏は「おもろそうし」や琉球開闢神話に登場するアマミキヨは製鉄技術をもつ九州の人々で、それは奄美から沖縄本島までである。これらは坊津の泊やそのとなりの秋目から鍛冶技術を南の島へ送り出した拠点であろうとしている。

奄美において鉄器等が発掘成果によって明らかにされた遺跡は少ない。本グスクを除いて6遺跡を数えるのみである。これは発掘資料によるもので表採資料では喜界島でも多く発見されている。アギ小森田遺跡、川掘遺跡、島中遺跡、大城久遺跡などからフイゴ羽口が発見されている。

第6表

大島における鉄器出土遺跡一覧表

1	サウチ遺跡	笠利町喜瀬字サウチ　1977年調査　笠利町教育委員会 出土遺物　フイゴの羽口、鉄滓等が発見されている。 鉄製品は発見されていない。 時　期　弥生時代 文　献　「サウチ遺跡」1978年　笠利町教育委員会
2	下山田3遺跡	笠利町万屋字下山田（東地区）1987年調査　笠利町教育委員会調査。 出土遺物・遺構 製鉄遺構　炉壁と思われる部分に版状の（ビーチロック）石が使用されている。12から13世紀の製鉄跡。 フイゴ羽口は全部で11点同一固体と考えられる。 文　献　「下山田3遺跡」1988年　笠利町教育委員会
3	面縄第1貝塚	伊仙町面縄　1982年調査　伊仙町教育委員会 出土遺物　鉄製品　用途・時代不明 文　献　「面縄第1、第2貝塚」1983年 「面縄貝塚群」1985年
4	手広遺跡	竜郷町手広　1978年調査　奄美考古学研究会調査 出土遺物　鉄片（第1文化層）
5	あやまる第2貝塚	笠利町須野字大道　1983年調査 出土遺物　棒状をした鉄製品。（第5層） 文　献　「あやまる第2貝塚」1984年　笠利町教育委員会
6	マツノト遺跡	笠利町宇宿字マツノト 1991年発掘調査　笠利町教育委員会 出土遺物　鉄滓、フイゴロ、くぎ、刀す、刀片、銅 はっきりした製品は出土していないが多数。 第1文化層出土（8世紀ごろ） 文　献　「奄美考古」3号　1992年　奄美考古学研究会

5．ピット群

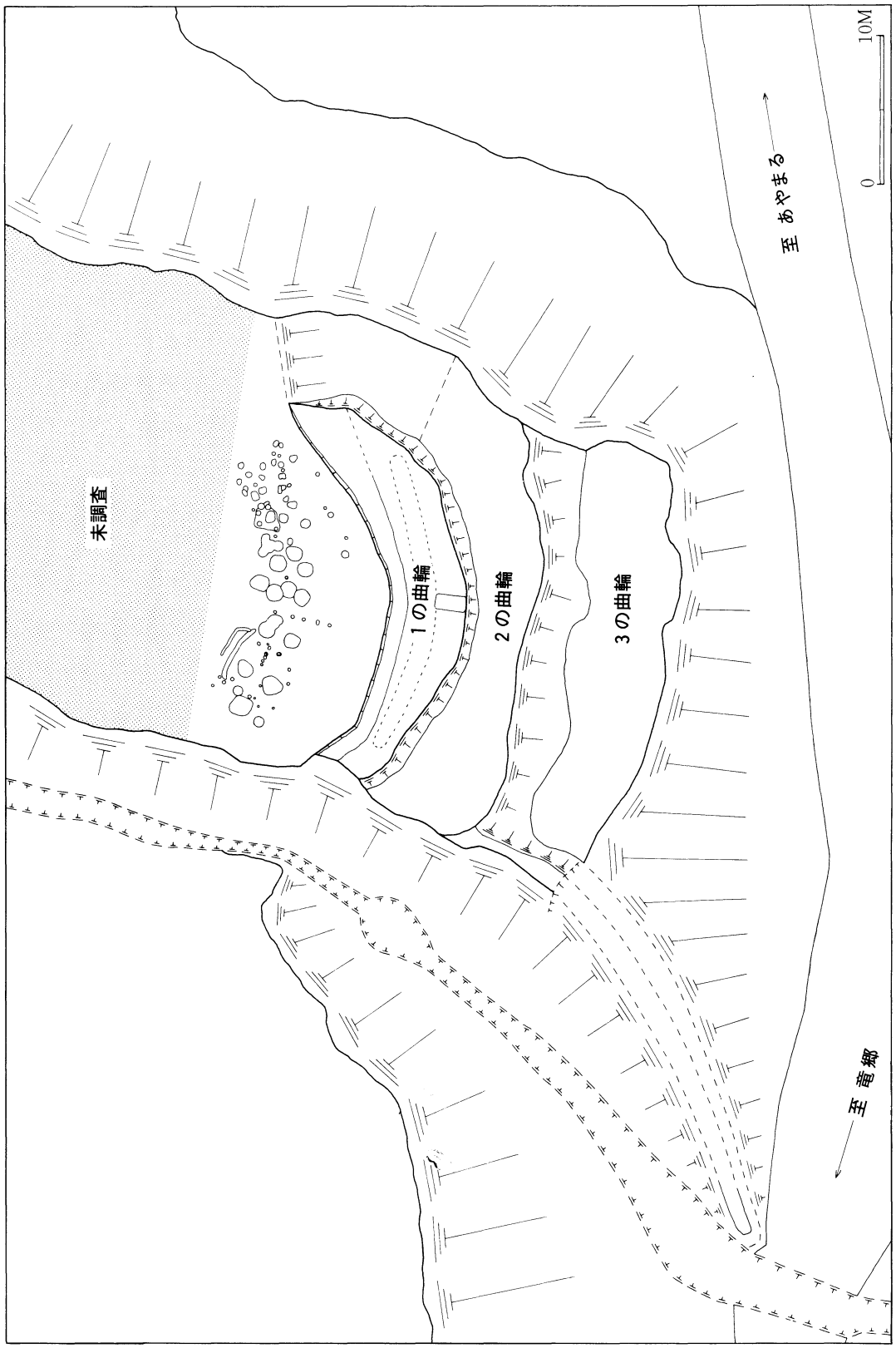
Ｆ－２、３、Ｇ－２、３区からは多数のピット群が検出された。そのまとまりははっきりしないが、サンゴや石が入っているピットもあり、あきらかに柱を固定するために使用されたものもある。ピットの中からは白磁や青磁も出土しており、深いもの浅いもの大小様々である。これらのピットは曲輪の北側に広がると思われる。

何らかの掘建て小屋のように思われるが、整然としてない。全体的に広げないと不明である。

6．溝状遺構

溝状遺構は１号建物跡の北側から検出され幅約30㎝で細長く東西にのびている２列をなし、何の意か不明である。溝状遺構からは青磁片も出土しており、柱穴や鍛冶跡と何らかの関連があると思われるが、現在のところ不明である。

溝状遺構ととらえるにも溝が浅すぎる感がする。一応プランで確認出来たのでそのまま記録する。



第17図　湊グスク全測図(概念図)

第２節　曲輪

２の曲輪

１の曲輪が海側（南側）に面し、半円状になっている。２の曲輪はこの１の曲輪の先端部分を囲んでいる。東側は以前にブルドーザーが下りていった跡が残っており、東側は破壊されている。西側は部分的にサンゴが積れているがグスクに関連するものか不明である。１の曲輪の下段、２の曲輪の上段には幅約１ｍ位の有段があり、２の曲輪全体にめぐらされている。いわゆる犬走り状になっており、粘土で固めて有段をなしている。２の曲輪の先端部分（南側）は前途した土留め様の遺構があり、全体的に小石等で補強されている。断面で観察すると多少土塁状になっている。２の曲輪の西側端は崖になっているが、西端は岩盤が平坦になっており、土類や石垣を積む基礎になる。サンゴ等が散乱しており、粘土でサンゴを固め土塁状になっていた可能性が大である。

２の曲輪からは出土遺物も多く、青磁、双魚紋、貝、釣針等が出土している。いずれも２の曲輪の中央帯からの出土が多い。

３の曲輪

３の曲輪は２の曲輪の下段にあたり、全体的にブルドーザーで削平され遺構等は不明である。この３の曲輪の中央部分から４の曲輪にブルドーザーが下りており、中央部分はブルドーザーのキャタビラ痕だけが残っていた。東西の先端部分は曲輪として残っており、旧地形はゆるやに４の曲輪に落ちている。この部分に石や粘土によって土留めをしており、かなり補強されている。

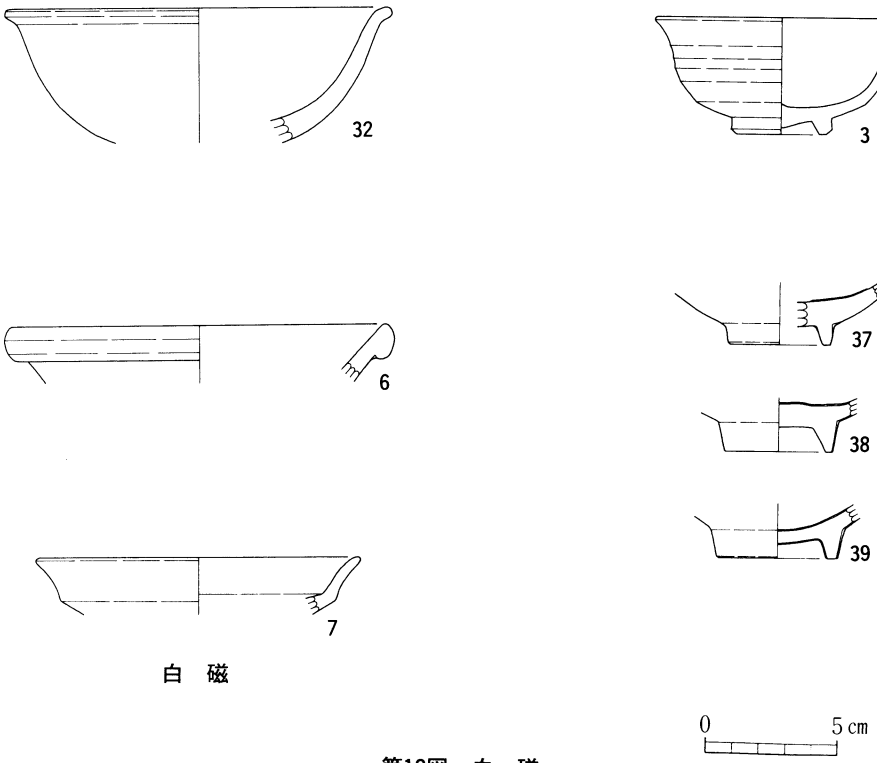
４の曲輪

３の曲輪の下段にあたり、西端には土塁が現存している。この土塁も４の曲輪から始まる基部の部分だけが残っており、与湾大親のトフル墓があったといわれるが、破壊され不明である。

土塁は高さ約１．２ｍ、幅（底部）２ｍ、頂部約１ｍと立派な土塁である。土塁は全体的に自然の地形を生かしながら造られており、上部は石等が積れ、補強されている。大島本島でこれ程立派に残っている土塁は現在のところ類例はない。

(注) ここで曲輪と呼んでいるのは、グスク全体にめぐらされてなく、部分的に囲まれていることを曲輪と呼んでいる。郭と記するには全体を独立した城郭を表現するものであり、グスクの平場的なものと考える。ミナトグスクにおいては完全に独立した郭とは確認出来なかったため曲輪とした。

第３節　出土遺物



第18図　白　磁

青白磁の出土遺物は表採資料４７点、発掘資料１０４点、計１５１点である。大半は青磁白磁が主であり、土器は一点も含まれていなかった。その他に鉄器２７点、銅銭１点がある。出土遺物については出土遺物データー表に記してある。

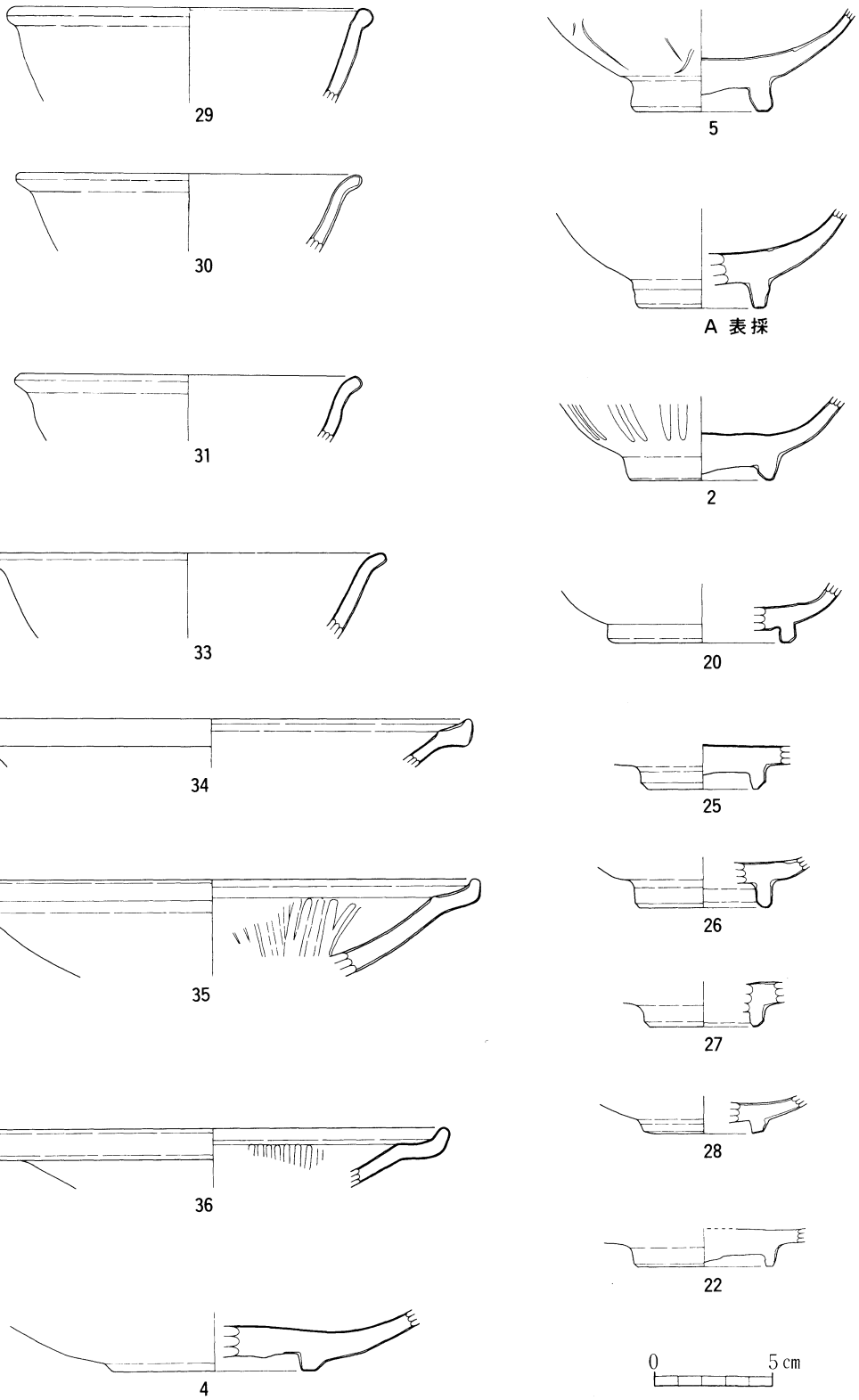
(1)　磁　　器

青磁、白磁、染付が検出された。すべて舶載品であり、中国産がほとんどである。量的には青磁片が多い。

①　青 磁 碗

第19図２は胴部から底部にかけての碗である。内底面から胴部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台内面には施釉されてないが一部分残っていることから器面全体に施釉されその後外底面の高台内面はふきとられた感である。胴部断面胎土は白色で外底面は赤褐色である。釉は内面の一部分がザラザラした感が残る。緑褐色である。二郭出土。

第19図５は器形、整形等は２に類似する施釉も内外器面全体にかかっており、外器面高台内側上部のみにかかっていないが上部の先端部にはかかっている。素地白色で釉色は暗緑色である。内底面には、字状のものがほぼ円形にスタンプされその上に施釉されている。



第19図　青　磁

第22図21、23は碗の底部と思われる。２つの資料とも器底の断面が厚い。21は内底面に何らかのスタンプ文様を有するがはっきり判らない。

青磁碗口縁部　第19図29～31

第19図29は口唇部が外器面に肥厚している。釉色は灰緑色である。素地は白色である。

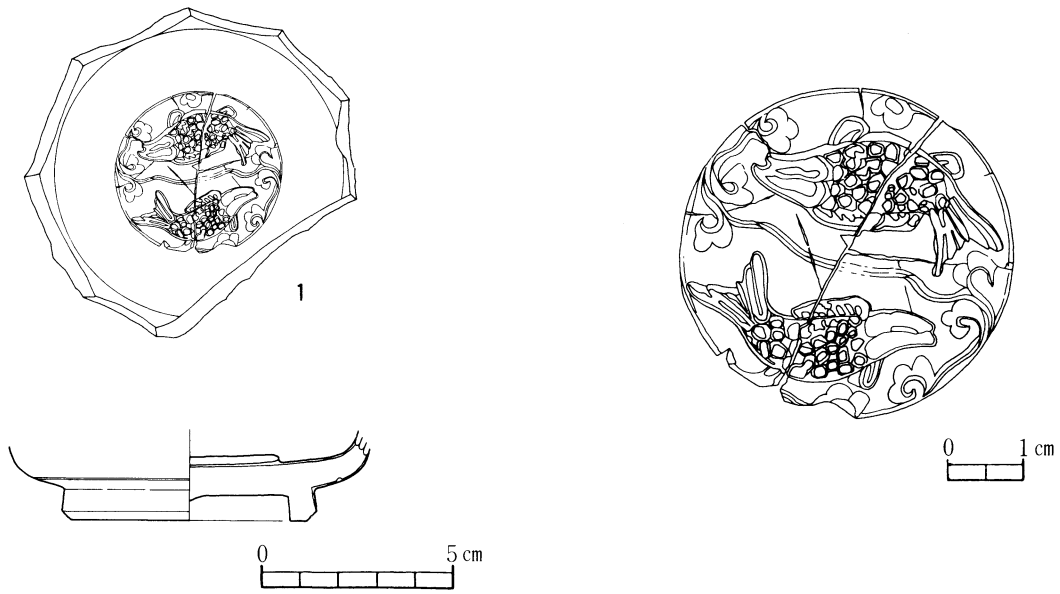
30は口縁部分が外反する。素地は乳白色で釉色は青白色である。

31は33とやや似ており、口唇部分が外反している。釉色は灰緑色で素地は淡黄色である。30の外器面は施釉が口唇部分から胴部にかけてたれた状態である。31、33とも全体的にややサメ肌的な感じがする。

以上は碗としての特徴がはっきりしているものだけを取り扱った。

②　青磁皿、第20図１（双魚藻紋）

素地は乳白色、釉色は青白色である。外器面高台内部だけが施釉されてなく、高台の底面まで施釉されている。直径約４．４㎝の円盤に双魚藻紋が型取りされ碗内底面に貼り付けられている。貼り付けられた双魚藻紋は施釉されてない。中央部に藻紋があり、上下に魚紋がある。断面に亀裂が入っており、他小さな亀裂がある。文様帯部分の素地は淡褐色であり、同一素地ではない。型取りされて貼り付けられたものと思われる。



第20図　双魚藻紋実測図

③　青磁盤

第19図4は2郭により出土した。素地は灰白色で無紋、施釉は全体にかかっており、外器面高台内面部分まで少しかかっている。淡緑色で内、外釉面に亀裂が入っており、全体的にかすんだ感である。

高台外面がゆるやかに段になっており胴部へと広がることからこの資料は盤として扱っている。37も盤としての特徴がある。高台が底く、外器面にゆるやかに続いている。

青磁盤口縁部

第19図35は二の曲輪から出土した。口縁部と胴部を復元した図である。素地灰白色で釉色は暗緑色である。釉全体にこまかい亀裂が入っている。34、36は一の曲輪からの表採資料である。34は素地は乳白色で釉色は淡青色ですきとおった色をしている。36は素地は灰白色で釉色も灰褐色である。全体的にザラザラした感がある。

以上が青磁盤として扱った資料である。

④　青磁皿、第19図20は底部で2の曲輪から出土した。素地は淡白色、釉色は灰緑色である。

高台は貼り付け高台で外器面から高台貼り付け部分の内側まで施釉されている。内底部分から少し立ち上りをみせている。底部の厚さはさほど厚くない。皿の出土例は少量である。

染付（第22図）、染付はこの資料1点のみである。1の曲輪出土。口縁部分で外器面に染付がある。素地は乳白色。

⑤　その他の底部

第19図Aは表採資料である。この資料は碗に入るが、文章作成後表採されたためその他の底部に入れた。素地は乳白色で釉色は淡青色である。高台部分内側まで施釉されており、高台内上部は施釉されていない。内底部にはスタンプによる文様がある。22、26は皿に近い底部と思われるが不明なためその他に入れた。22、26は他の底部に比べ底部の器肉が薄いことから皿と思われる。25は素地は灰白色で釉色は灰褐色の底部である。（2の曲輪出土）26は高台部分がやや高く淡緑色である。27は素地内部が赤褐色で外器面胴部は灰白色である。釉色は淡青色である。（2の曲輪出土）28の素地は乳白色で釉色は灰青色である。（1の曲輪出土）

第22図10は青磁染付碗と思われる口縁部の資料が1点出土している。

⑥　白　　磁

白磁は全部で19点出土しており、図面で復元出来る資料は１点のみである。器種はほとんどが碗である。皿が１点で注口と思われる部分が１点である。

第18図３は復元出来た唯一の資料である。第３号ピットの内から出土。色調は薄い青白色である。素地は乳白色である。内器面の底部中央部と外器面の底部中央がふくらんでおり、ロクロ引きの整形時についたものと思われる。高台は貼り付けで高台部分は内、外器面とも無釉である。白磁として取り扱っているが、青白磁の可能性もあり、今後もう少し検討したい資料である。

第18図32は口縁部分がやや外反している。底部は欠損しており不明である。素地は白色であるが焼成はあまり良くない。色調は灰白色でくすんだ色をしている。釉ののりが悪く内、外器面ともまだらである。

第18図６は玉縁碗である。玉縁の肥厚は大きく、肥大化している。器形の特徴としては高台部分から逆「ハ」の字状に開きながら口縁に移行する。素地は乳白色である内外器面に全釉されている。口縁部分の表採資料である。

第18図７は皿である。皿にも数タイプの特徴があるが、ここでは口縁部近くが立ち上がりを見せる資料１点のみである。沖縄県玉城村教育委員会の糸数城跡の報告書では同類の皿を「腰折皿」としているものと共通する。

第18図37～39は底部資料である。37は内器面底部中央部を残して無釉である。内器面胴部からは施釉されている。外器面は高台部分も全釉されている。38は内器面は全釉されているが、高台部分面は無釉である。また高台部分２ヶ所に無釉の部分があるが施釉の際に高台部分を指でつかんで施釉した跡と思われる。39は内外器面、高台部分も含めて全釉されている。比較的薄手である。外器面底部に焼成時に附着したと思われる粘土粒がある底部のその他に２点出土しており、全部で５点の出土である。37～39は二の曲輪出土の資料である。

⑦　青 白 磁

湊城出土の青白磁は小片を含めて９点の出土である（表採資料を含む）。第22図８は表採資料で青白磁の口縁部である。内器面口縁部近くに浅い沈線をめぐらすだけで無紋である。第22図９は底部資料で高台部分は無釉で他は全釉されている。Ｅ－６区出土の資料である。８、９とも素地は乳白色ある。口縁部資料２点、底部２点、胴部５点、計９点である。

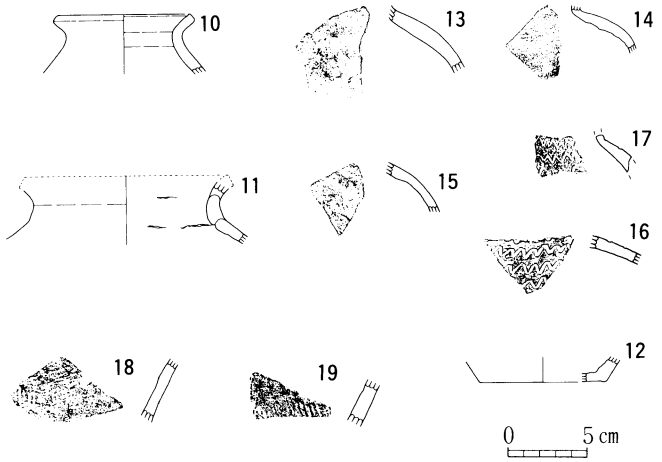
⑧　類須恵器

類須恵器は全部で33点出土した。口縁部２点、底部１点、他は胴部である。類須恵器はほとんどがカムイヤキ産と思われるが、３点は胎土に砂粒子が多く混入しており、焼

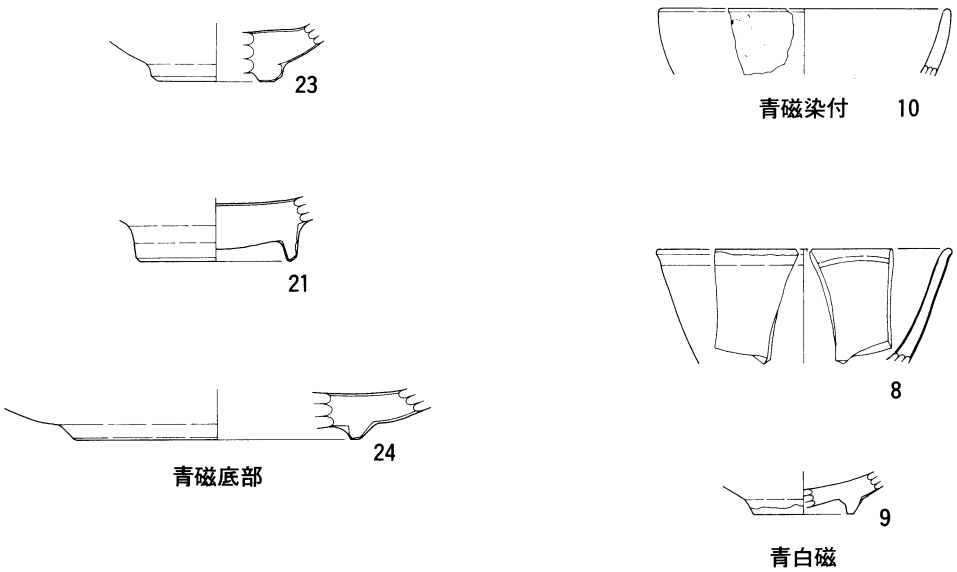
成も良好である。少し気になる資料であるが他との類例があれば今後の比較研究の課題にしたい。

第21図10、11は口縁部資料で内外器面はセメント色をしているが内部は赤褐色である。ほとんどの資料が同様である。11は内面に粘土の接合痕が見られる。第21図16、17は肩部で波状痕を有する。

全体的につくりは雑である。前途したようにカムイヤキ産とちょっと違った感のする資料も含まれていることから（第21図18）注目したい資料である。



第21図　類 須 恵 器



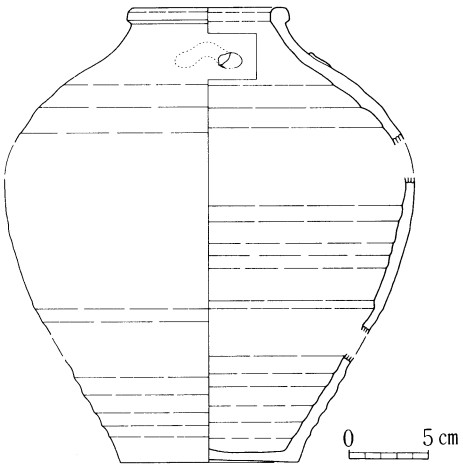
第22図　青白磁出土状況図

⑨　染　　付

今回の調査で得られた染付は肥前系が29点、中国系が33点である。いずれも小片のため器形ははっきりしないが、碗、壺、皿類である。中国系としたものは琉球大学池田栄史助教授の指導によるものである。

⑩　褐釉陶器

褐釉陶器は2種類である。第23図1は図で復元出来た壺である。素地は赤褐色である。口径10.3cm、器高28.5cm、底径11.3cmの耳付き壺である。耳部分は欠損している。2は薄手の陶器である。セメント色をしており須恵器に類似する。胴部の4の出土である。



第23図　褐 釉 陶 器

⑪　貨　　銭（第24図6）

貨銭は1点だけの出土である。4号土溝から出土したが、貨銭の1部分だけで判読不明である。

⑫　滑石製製品（第24図7）

方形の滑石製品である。方形中央部分はやや大きく先端部は細くなっている。横に一条の凹線をめぐらしている。セクションベルトの東区より出土。

⑬　軽石製品

軽石の中央部に大きな凹線があり、凹線は横、縦にもあり、軽石全面にある。用途としては「と石」として使用されたものと考えられる。近年まで鉄のサビ落しに軽石が使用されており、と石としても使用されていた民俗例もある。

⑭　鉄 製 品（第24図）

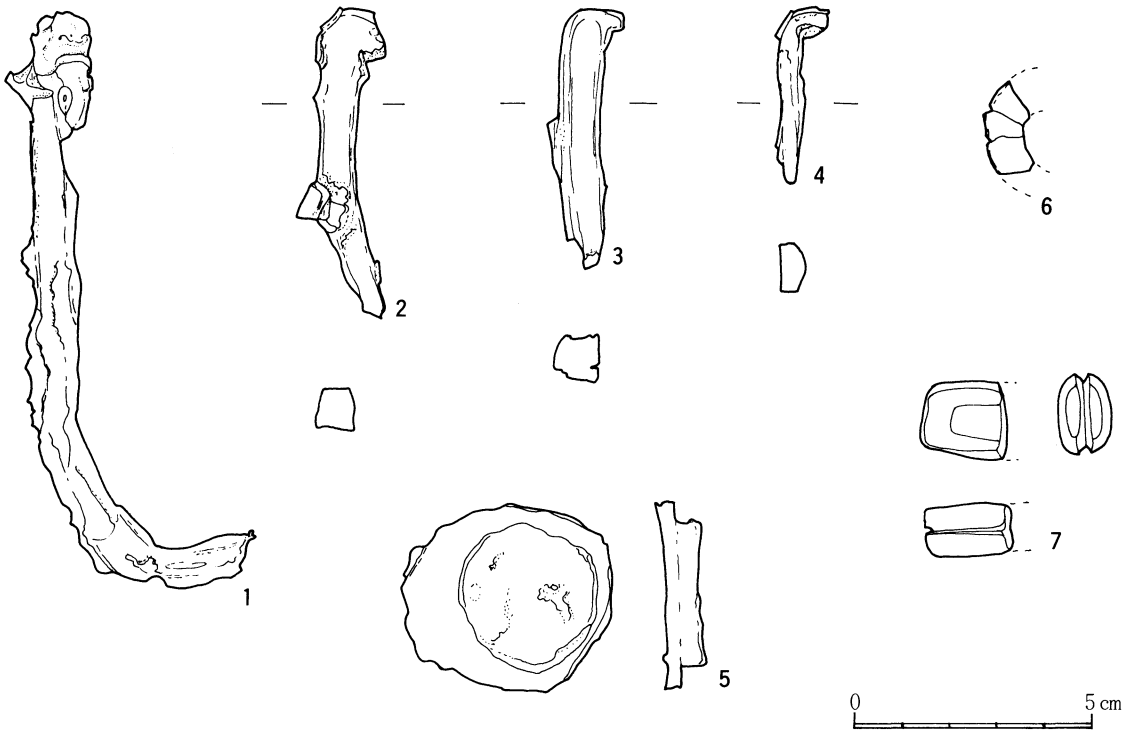
鉄製品としては釘3点、鍋1点、釣針1点ははっきりしているが、不明なものは28点である。不明なものとしては枚状のもので、小片のためはっきりしない。

釘は方形のもので頭部はＬ字状になっている。類例は沖縄のグスクからも角釘として報告されている。

⑮　鉄　　滓

鉄滓は鍛冶跡の焼土近くからまとまって出土している。化学分析を行ってないため製錬作業、鍛冶作業中いずれから流出したものかは不明である。遺構も出土していることからここでは単純な鍛冶作業が行われていたと思われる。

注１．照屋盛三・金城亀信ほか『糸数城跡』玉城村教育委員会、1991年３月
金武正紀ほか『今帰仁城跡発掘調査報告１』今帰仁村教育委員会、1983年
盛本　勲・上原　静ほか『勝連城跡』勝連町教育委員会、1990年３月



第24図　鉄，骨石，銅銭

調査の成果

奄美における本格的なグスクの調査は今回がはじめてである。熊本大学が行った龍郷町戸口ヒラキ山の試掘調査、徳之島天城町、笠利町辺留窪遺跡、同町万屋下山田皿遺跡、城間グスクなどがこれまで調査されているが、城としてのグスクが本格的に調査が行われたのははじめてである。

奄美のグスクについては本土の山城との関連や沖縄との関連もあり、かなり注目されているが、まだまだ不明点が多すぎるのが現状であろう。グスクの地形的特徴は1、海岸線にある舌状台地を利用したもの2、やや海岸線から離れた台地状にあるもの3、山裾に独立した地形をなすもの等大まかに3つに分けられる。ニヤトグスクは1にあたる。そのいずれも掘り切りを有する。土留をめぐらすものと、低い石垣を持つものとがあるが、土留も石垣もないものもある。

掘り切りは山裾から延びてくる台地状を数ケ所掘り切る。赤木名グスクのように九ケ所も掘り切られている例もあるし、当グスクや辺留グスクのように1ケ所の場合もある。この掘り切りがさほど大規模でなく防御のためのものとしてだけとらえるのは無理があろう。掘り切りが数ケ所あってそれで防御が可能ならば別である。当グスクの場合は掘り切り部分が農道として使われており、不明な部分も多い。

ニヤトグスクの成果は自然の地形を生かしたグスクであると言えよう。自然の外掘り的な役割を果している大きな発達したリーフや舌状台地になった地形をうまく利用して曲輪をつくっている。曲輪は海に面した南側部分だけで後方山手（西側）にはない。台地全体でなく舌状に延びた先端部分に形成されている。2の曲輪では犬走り状の段もあり、かなりしっかりしていた。3の曲輪は大きな土塁の一部が残っていたり、曲輪自体何らかの利用方法があったと思われる。奄美のグスクでは円グスク、赤木名グスクなどにもある。また曲輪を持たないグスクもある辺留グスク、ヒラキ山グスク、伊津部勝グスク、フーグスクなどは曲輪を持たない。曲輪を有するグスクと有さないグスクとは時代差があると思われるが、今後のグスク研究の成果を待ちたい。

ニヤトグスクの後方（山手側）には小さな小川が流れており、その小川はグスクの西側部分に流れて海に続いている。そのため後方には湿地帯もあり、現在田んぼとして使っている。ニヤトグスクの場合は有水源や水の利用についてはさほど不自由はしなかったものと思われる。

このように自然の地形をうまく生かしたグスクである。遺構については四本柱の建物跡が確認され、その床直には鍛冶跡と思われる焼土が二ケ所確認されている。建物跡と鍛冶跡の関係ははっきりしないが、ほぼ同時期と思われる。いずれも奄美では初めての発見のため類例の増加をまちたい。四本柱は遺構の切り合いから3回にわたって建て替

えられたと思われる。台地の先端のため、かなり風雨も強くあたる場所と思われる。それは調査期間中も台風に合い、プレハブと3の曲輪にあった大きなガジュマルが被害に合ったことで、証明ずみである。グスク時代の人々も台風には今と同じように泣かされていたことと思う。

建物跡としては無数のピットが検出されているが、台地の北側まで広がっていると思われる。むしろ、建物跡の本丸部分は未調査部分にあると思われる。南側台地先端部分は四本柱やピットがあり、そのピットの広がりは北側に広がるということである。マージを掘っての建物はかなり苦労したと思われる。四本柱の大きなピットには岩板を削った跡ももはっきりしていることからノミ状の道具を使用して掘っている。ノミ状の道具となると、鍛冶跡も確認されていることから鉄器の使用も考えられよう。

奄美のグスクにおいてはすでに鉄の使用がかなり普及していたと思われる。鉄文化の普及でグスク時代が開花したと思われる。田畑を開拓するのにも大陸や南方、本土と貿易を行うための船の修理等も行われたであろう。当グスクから出土した舟クギや鍛冶跡からうかがうことが出来よう。

出土遺物では青、白磁、類須恵器等があるが、なかでも双魚藻紋は全国的に注目される。まだ沖縄でも日本でも出土例はないと思われる。それ程数少ない大陸の青磁である。このような貴重な物が当グスクから出土したことは、当グスクが貿易を中心としたものであると言えよう。ニヤト（港）を中心としたグスクに後方ヤマ（山）を中心としたグスク、そして中心部にフーグスク（大きなグスク）がある。用安集落は、この3つのグスクから守られて発展したことがうかがえる。ひとつの集落に3つのグスクがある地域は少ないが、かなりしっかりした集落を形成している。笠利、宇宿、屋仁、赤木名、喜瀬以上が笠利町で3つのグスクから守れて集落が形成されている。これらのグスクの勢力関係についてはまだ不明な点が多すぎるが、交流路はそのほとんどが海路である。ましてや物資等を運ぶとなれば海路の方が近くて安全であろう。

奄美のグスクが沖縄と違って大きな城壁を持たないのはまだアジ達がそれぞれの領地を侵略するような戦がなかったからではなかろうか、すべて海路であり海を意識したものであるから貿易を中心に、貿易だけを考えて生活を行っていたのではなかろうか、大陸と行っていた私的貿易がやがては沖縄で開花する琉球王国の基盤になったのではないだろうか。そのような大きなロマンをも与えるグスクである。

奄美のグスクの調査が進むにつれてこのような大きな仮説が立ち、また沖縄との関係もあきらかになり、九州本土とのつながりも解明されていくことだろう。今回の調査はそのグスク時代の調査の第一歩の段階と考える。

図　　版

干潮のリーフより

東側より

土塁側面

土塁上部部分

面側斜面

土層断面　東側より

土留め石とサンゴ

発掘スナップ

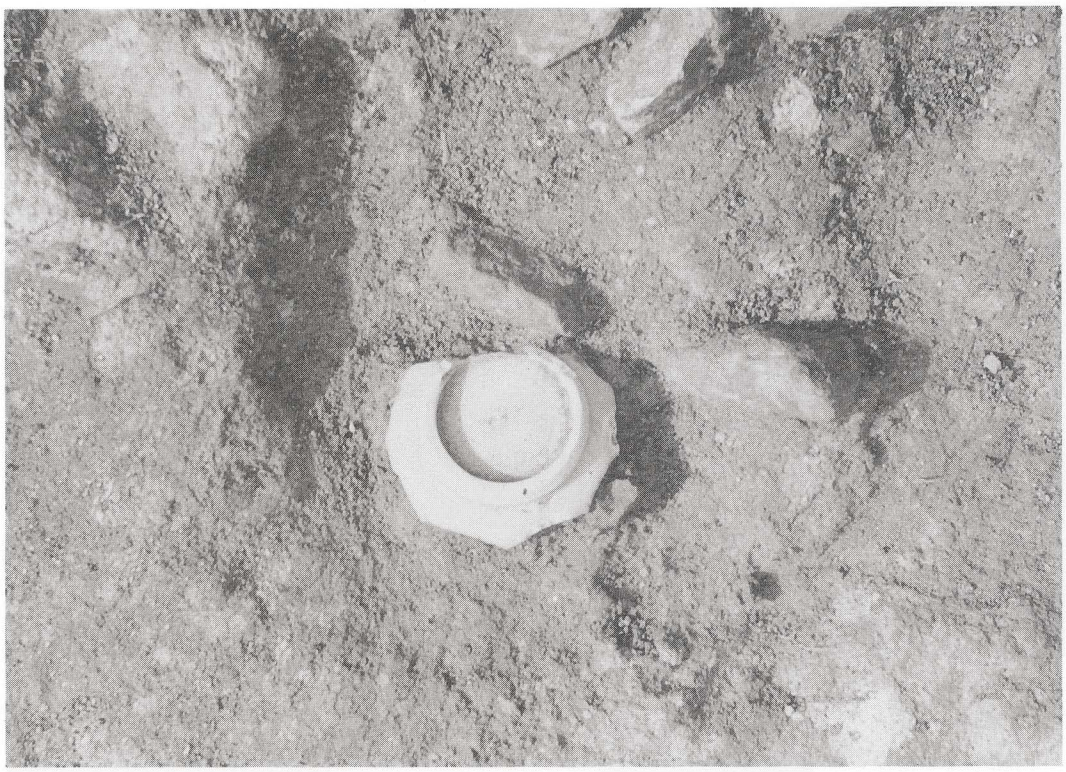
上　四本柱　2号と3号

下　ピット群

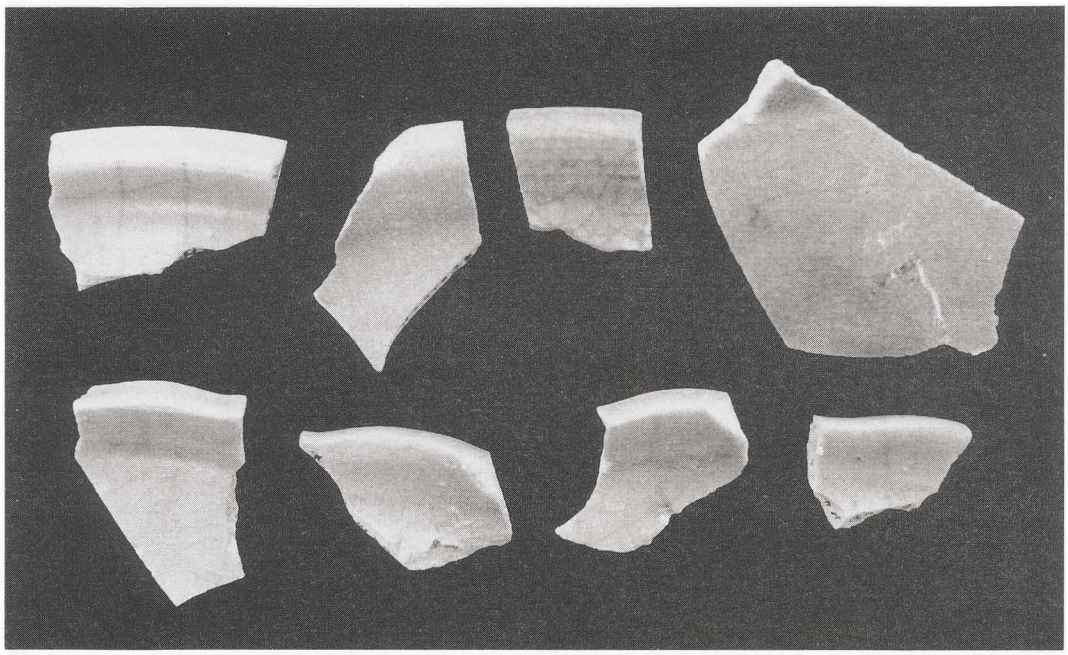
上　四本柱　2号
下　四本柱と溝　1号

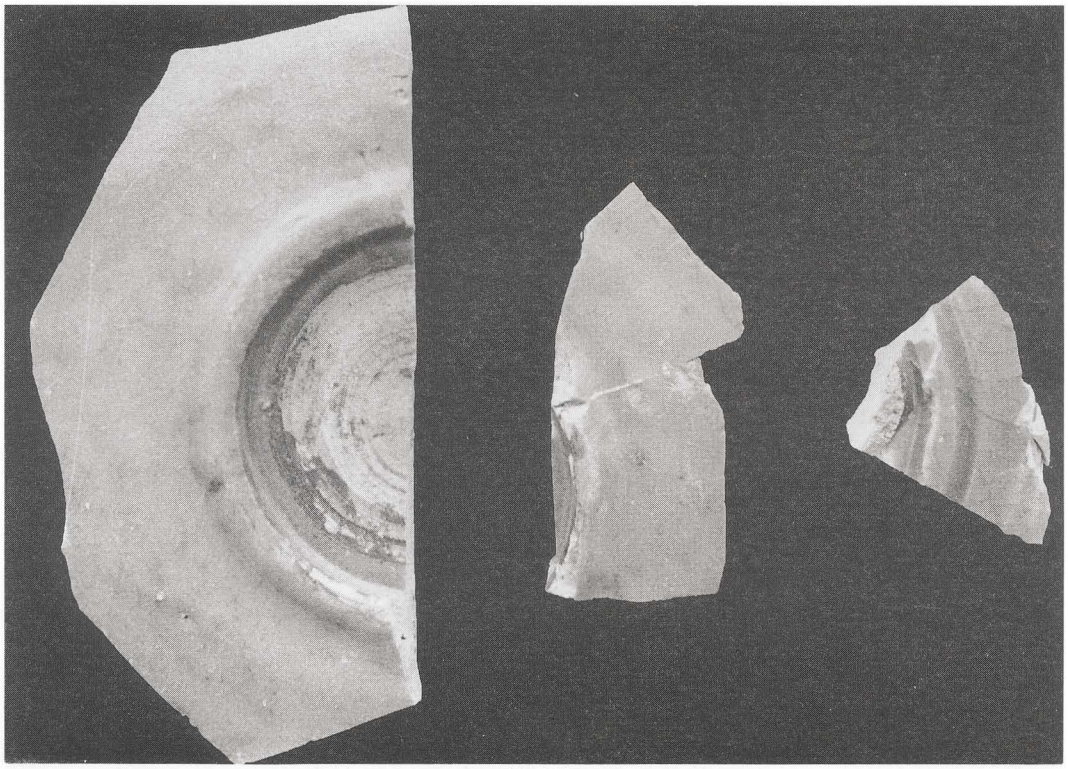
ピット出土状況

ピット出土状況　1・2号

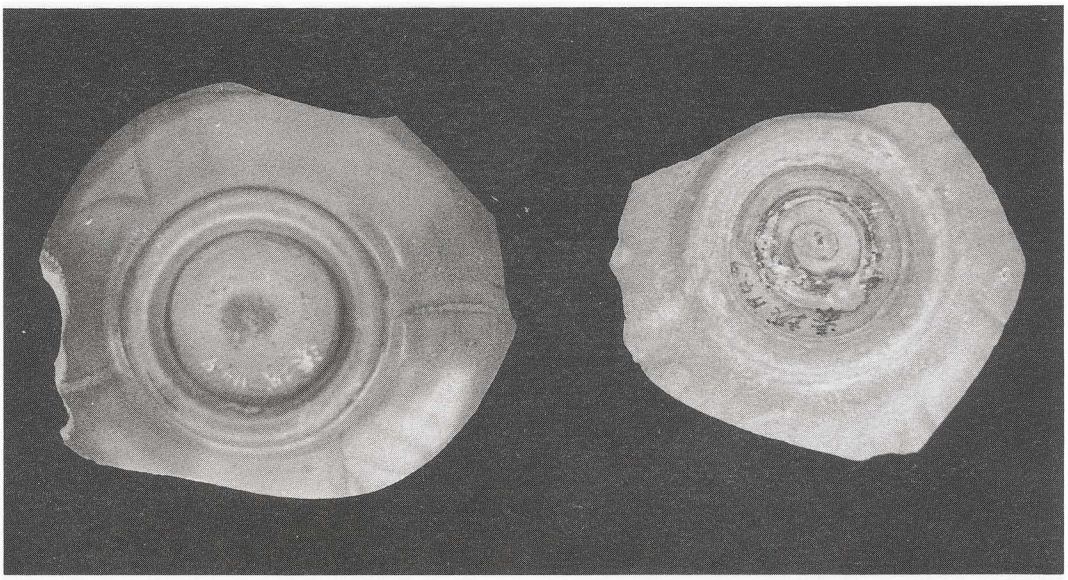


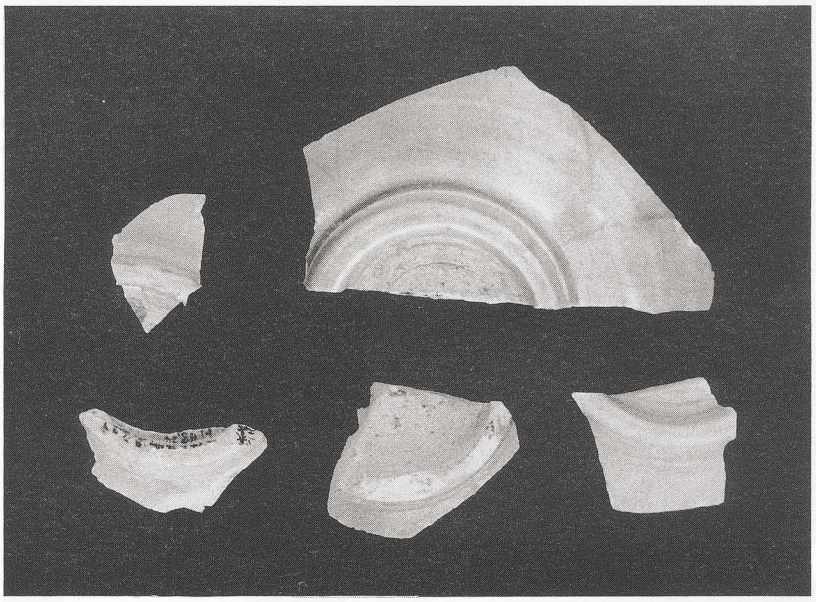
遺物出土状況　上 青磁，下 白磁

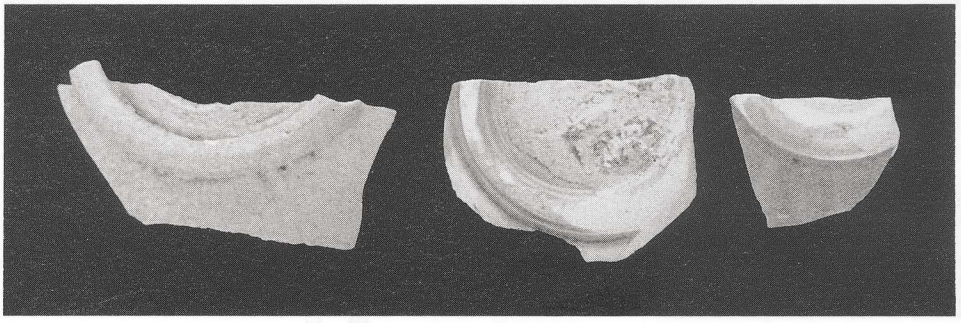




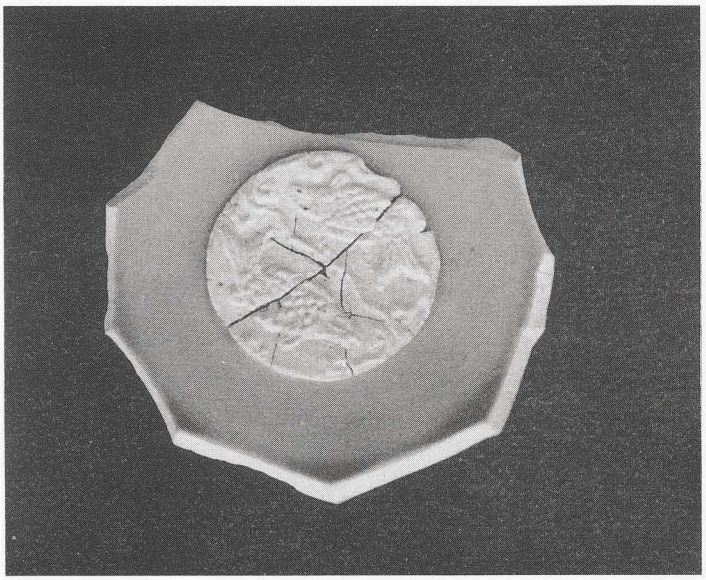
青　磁



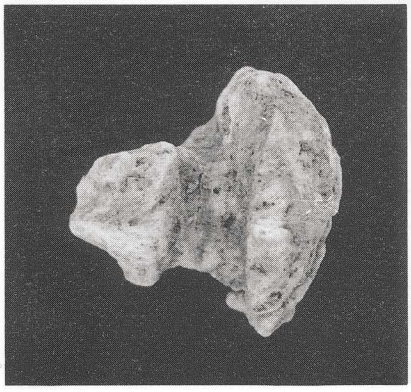




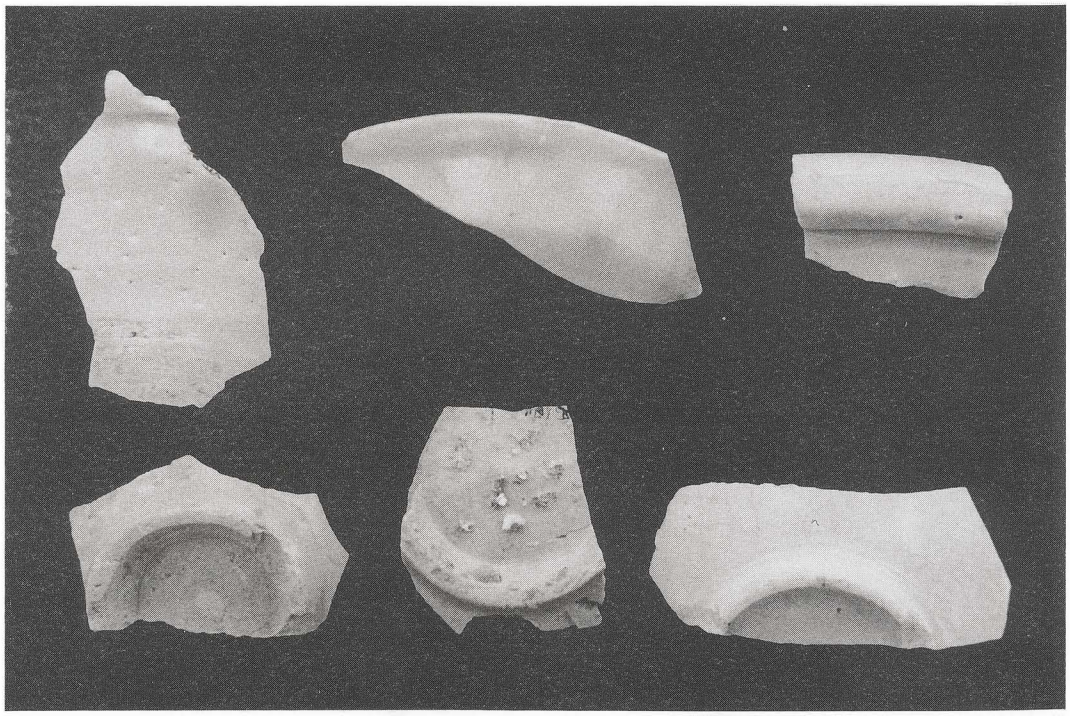
青　磁

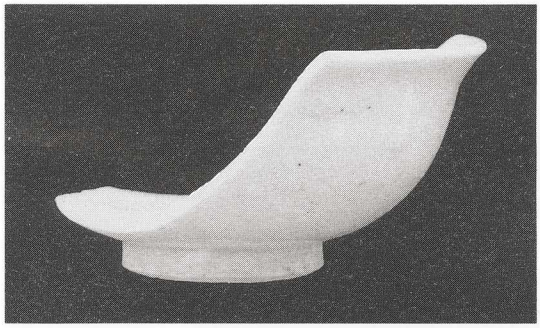


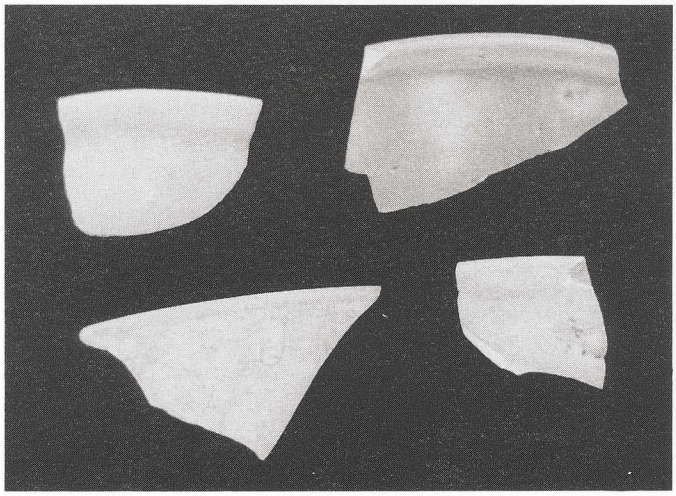
双魚藻紋



軽石製品





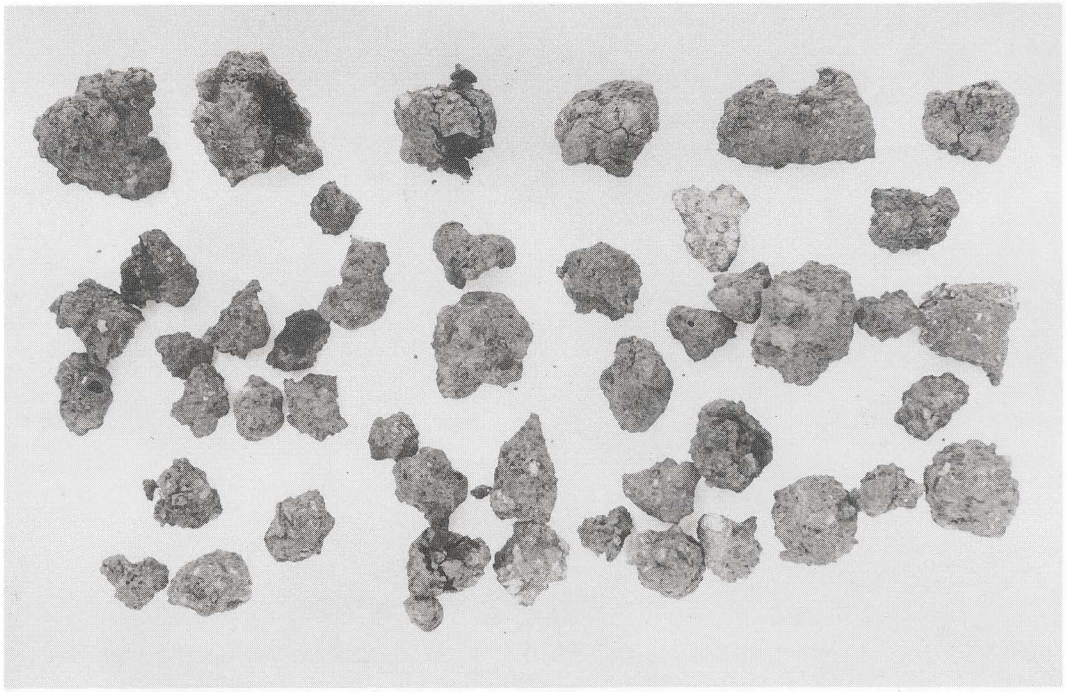


白　磁

船くぎ

鉄ナベ

つりばり



鉄　滓

褐釉陶器

上　文化財少年団　発掘体験学習

下　現地説明会

笠利町文化財報告第１９集

用安湊城（ニヤトグスク）

発行年月日：平成５年３月３１日

編集・発行：笠利町教育委員会

鹿児島県大島郡笠利町中金久

Tel 0997－63－1218

印　　刷：ト　ラ　イ　社

鹿児島市南林寺町12－6

Tel 0992－26－0815